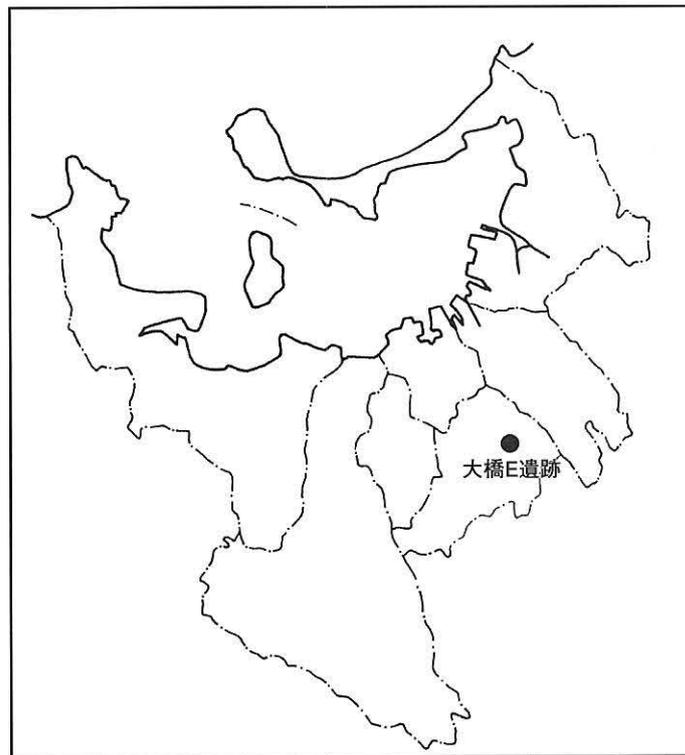


大橋E遺跡6

—第8・9次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第791集



調査番号 0131 0203
遺跡略号 OOE-8 OOE-9

2004年

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝え残していくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では、開発事業に伴いやむをえず失われていく埋蔵文化財について事前に発掘調査を実施し、記録保存に務めています。

本書は道路建設に先立ち調査を実施した大橋E遺跡第8・9次発掘調査の報告書です。今回の調査においても多くの貴重な成果を上げることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘にあたりご協力とご理解をいただいた土木局道路建設部南部建設課、地域住民の皆様をはじめとする関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成16年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 生 田 征 生

例 言

1. 本書は福岡市教育委員会が長浜太宰府線道路建設に伴い、福岡市南区大橋4丁目地内において実施した大橋E遺跡第8・9次調査の報告書である。
2. 本書に掲載した遺構の実測は阿部泰之、上角智希が行った。
3. 本書に掲載した遺物の実測は阿部、上角が行った。
4. 本書に掲載した挿図の製図は阿部、上角が行った。
5. 本書に掲載した写真は阿部、上角が撮影した。
6. 本書の執筆は第一、二章を阿部、第三章を上角が担当し、編集は上角が行った。
7. 本書で用いる方位は磁北である。
8. 遺構の呼称は溝をSD、柵列をSA、掘立柱建物をSB、土塋をSK、その他の遺構をSX、ピットをSPと略号化した。
9. 本書にかかわる図面、写真、遺物等は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。

遺 跡 名	大橋E遺跡第8次調査	調 査 番 号	0131
現 在 地	南区大橋4丁目14-30	遺 跡 略 号	OOE-8
開 発 面 積	235 m ²	調 査 面 積	151.9 m ²
調 査 期 間	平成13年10月15日～平成13年11月9日		

遺 跡 名	大橋E遺跡第9次調査	調 査 番 号	0203
現 在 地	南区大橋4丁目6他	遺 跡 略 号	OOE-9
開 発 面 積	1400 m ²	調 査 面 積	830 m ²
調 査 期 間	平成14年4月1日～平成14年7月30日		

目次

第一章 はじめに	1
1. 調査にいたる経緯	1
2. 調査体制	1
3. 遺跡の立地と歴史的環境	2
第二章 第8次調査の記録	5
1. 調査の概要	5
2. 遺構と遺物	5
1) 溝 (SD)	5
2) ピット・柱穴 (SP)	5
3) 小結	8
3. まとめ	8
第三章 第9次調査の記録	9
1. 調査の概要	9
2. A区の調査	9
1) 中近世の遺構と遺物	9
2) 縄文・弥生時代の遺物	17
3) 小結	18
3. B区の調査	20
1) 近世の遺構と遺物	20
2) 弥生・古墳時代の遺物	21
3) 小結	23

挿図目次

第1図 大橋E遺跡と周辺の遺跡 (1/50,000)	3
第2図 大橋E遺跡調査区位置図 (1/4,000)	4
第3図 SD01溝土層断面実測図 (1/20)	5
第4図 SD01溝出土石器実測図 (1/2)	5
第5図 第8次調査区位置図 (1/1,000)	6
第6図 第8次調査区全体図 (1/100)	7
第7図 調査区東壁土層断面実測図 (1/80)	8
第8図 SA02柵列実測図 (1/80)	8
第9図 SA02柵列出土土器実測図 (1/3)	8
第10図 第9次調査区位置図 (1/800)	10
第11図 大橋E遺跡第9次調査A区 遺構配置図 (1/200)	11
第12図 SD03実測図 (1/100、1/40)	12

第13図	S D03出土遺物実測図 (1/3)	13
第14図	S B19実測図 (1/80)	14
第15図	S K07・08・09・15実測図 (1/60、1/30)	15
第16図	S K07・15出土遺物実測図 (1/3)	15
第17図	S X10実測図 (1/60)	16
第18図	S X11実測図 (1/80)	16
第19図	S X10・11出土遺物実測図 (1/3)	17
第20図	縄文時代包含層 トレンチの位置と土層 (1/400、1/100)	18
第21図	縄文、弥生時代の遺物実測図 (1/1、1/2、1/3)	19
第22図	大橋E遺跡第9次調査B区 遺構配置図 (1/80)	20
第23図	B区東壁土層実測図 (1/100)	20
第24図	S D201・202土層実測図 (1/40)	21
第25図	S K203実測図 (1/60)	21
第26図	S D201・202、S K203出土遺物実測図 (1/3、1/4)	22
第27図	弥生、古墳時代の遺物実測図 (1/3、1/4)	23
第28図	第7次・9次B区調査 遺構配置図 (1/250)	24

図 版 目 次

◎第8次調査

- 図版1 調査区全景 (北より)
 図版2 (1) 調査区より道路予定地南方を望む
 (2) S D01溝土層断面 (東より)
 (3) 出土遺物

◎第9次調査

- 図版3 (1) A区全景 (南東から)
 (2) A区南半 (北西から)
 図版4 (1) A区北半 (北東から)
 (2) S D03 (北東から)
 図版5 (1) S D03土層A-A' (西から)
 (2) S D03土層B-B' (東から)
 (3) トレンチA西壁土層
 図版6 (1) B区全景 (南から)
 (2) B区北半遺構検出状況・陸橋部 (北から)
 図版7 (1) B区北半東壁土層
 (2) S D202土層A-A' (南から)
 (3) S D201・202土層B-B' (南から)
 図版8 第9次調査出土遺物

第一章 はじめに

1. 調査に至る経緯

都市計画道路長浜太宰府線は、昭和21年に都市計画決定された国道385号線に接続する総延長850mの道路である。

平成12年11月20日、土木局道路建設部南部建設課から、都市計画道路長浜太宰府線道路建設工事予定地内における埋蔵文化財の有無を確認するため、調査の依頼が教育委員会文化財部埋蔵文化財課（以下、埋蔵文化財課）に提出された（土木第2196号）。申請地は、周知の文化財包蔵地である大橋E遺跡の範囲内であった。そのため、これを受ける形で、同課は、申請地内にて遺構の遺存状態確認のため、予定地の取得にあわせて、平成12年12月26日、平成13年5月30日、6月13・18・20日に試掘調査を実施した。14箇所にトレンチを設定したところ、うち5本（3地点）で遺構を確認した。よって、この部分について記録保存のための発掘調査が必要である旨を回答した。その後、南部建設課と埋蔵文化財課の2者で協議を重ね、工事工程にあわせたかたちで、大橋E遺跡第8・9次調査として本調査を実施することとなった。

2. 調査体制

調査体制は、下記の通りである。本調査・整理作業・報告書作成は、土木局道路建設部南部建設課をはじめ、関係者および周辺住民各位の御理解・御協力の下、順調に推移した。記して感謝の意を表するものである。

調査委託	土木局南部建設課
調査主体	福岡市教育委員会 教育長 生田征生
調査総括	文化財部長 柳田純孝（前任）、堺 徹（現任） 埋蔵文化財課長 山崎純男 同課調査第2係長 力武卓治（前任）、田中壽夫（現任）
調査庶務	文化財整備課 宮川英彦（前任）、御手洗清（現任）
試掘担当	瀧本正志
調査担当	阿部泰之（第8次調査） 上角智希（第9次調査）
発掘作業	佐藤俊治、嶋ヒサ子、西田文子、野田淳一、宮本碧、持丸玲子、森田祐子、 平川正夫、平位拓巳（第8次調査） 伊豆丸剛史、井上ヨシ子、岩永崇史、尊田絹代、徳山孝恵、富田猶生、富永美樹、 長野嘉一、中村桂子、前田勉、三浦まり子、宮崎雅秀、芳井宏（第9次調査）
整理作業	窪田慧、黨早苗（第8次調査） 久家春美、黒柳恵美、篠原明美、西嶋奈美（第9次調査）

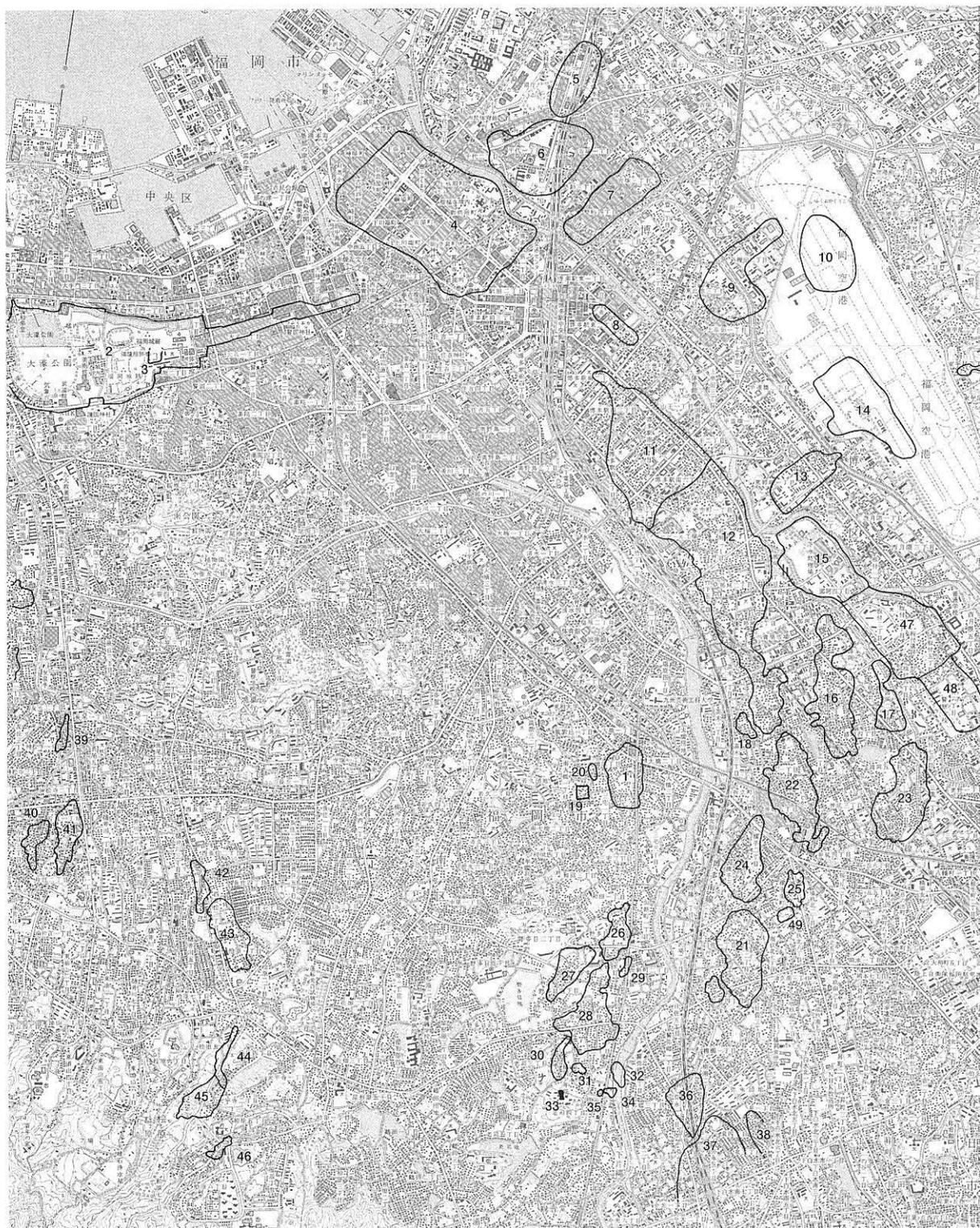
3. 遺跡の立地と歴史的環境

大橋E遺跡は、福岡平野を貫流する那珂川の中流域右岸に分布する沖積微高地に立地する。この沖積地の西には、油山山塊から派生する標高約30m程度の低丘陵が伸びてくる。昭和初めの地形図によると、旧状は水田であり、調査区西側・南側を通る生活道路が当時から存在していたことがわかる。西側の丘陵地は、多くは山林であり、墓地として記載されている部分も少なくない。大橋周辺に居住する人々の墓域であったのだろう。周辺にはため池も存在していたようである。

周辺の遺跡に目を向けてみると、まず西には、三宅廃寺が所在する。1977年に最初の調査が行われ、現在までに瓦溜り・布堀地業を伴う総柱建物・3×4間の掘立柱建物・溝・土壇などが検出され、老司I式を主体とする瓦類・磚・輸入陶磁器・木簡・石帯巡方・ガラス製品などが出土している。これらの遺物から、7世紀から9世紀前半まで継続した寺院跡で、規模は東西100～110m程度と推定されている。また、その関連遺跡として三宅瓦窯跡・岩野瓦窯跡が知られている。大橋E遺跡周辺には、ほかに大橋A～D遺跡・三宅A～C遺跡・和田A・B遺跡が所在するが、調査例が僅少であるためこれらの遺跡の詳細は不明である。おそらくこれらの遺跡は、沖積微高地上に立地することから、中世前半以降、沖積地の開発が開始されるなかで形成された集落の遺跡であろう。

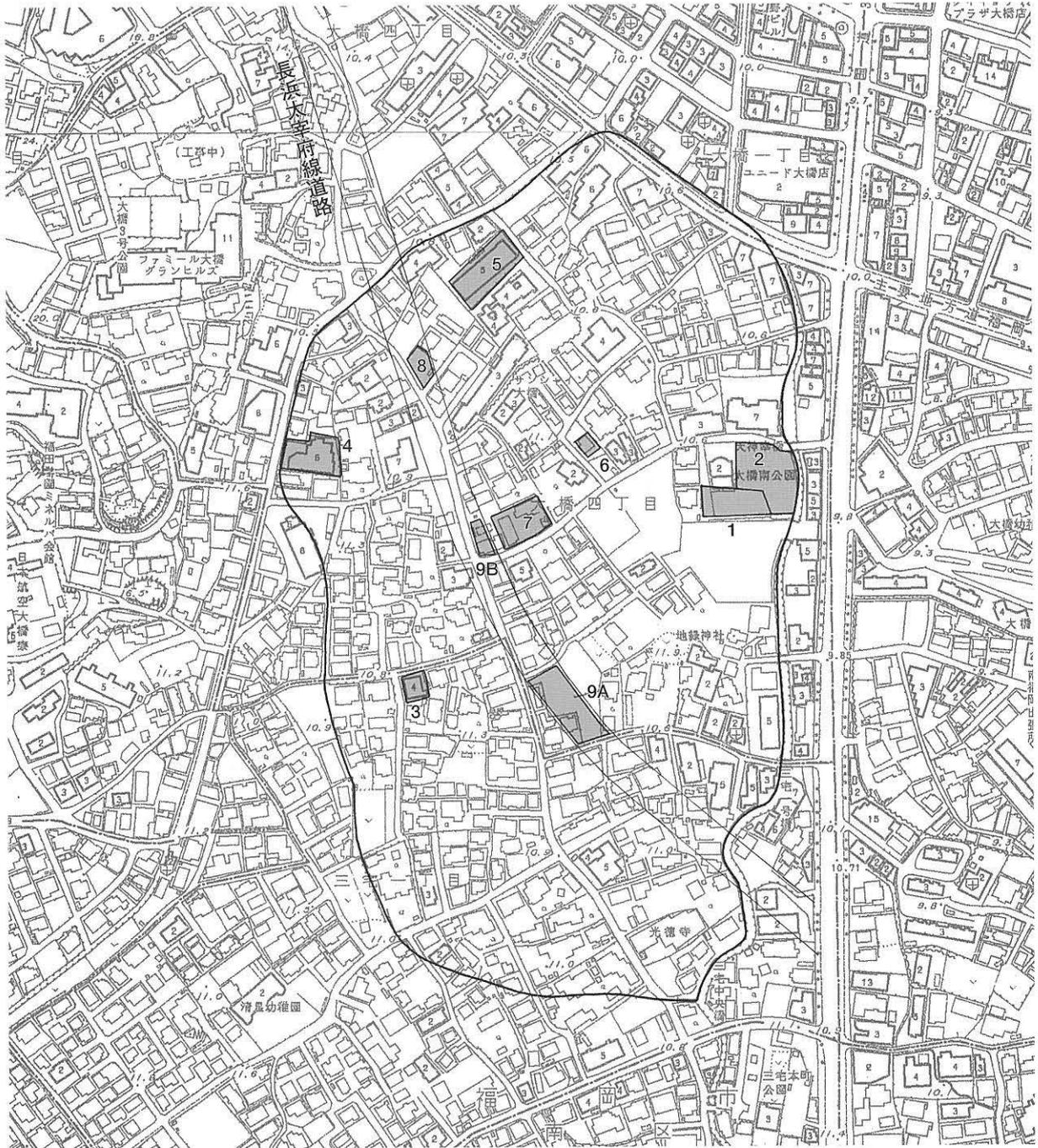
さて、現在に至るまで、大橋E遺跡においては、9次にわたる調査が行われている（第2図）。第1次調査では、弥生時代前期後半から古墳時代前期にかけての土壇群が検出された。包含層から弥生時代中期の土器・扁平片刃石斧・細型銅剣と思われる鋳型片が出土している。第2次調査では、弥生時代前・中期の土壇・中世の溝が検出された。不定形の土壇に伴って朝鮮系無紋土器が出土している。このほか、遺構に伴わないながらも越州窯系青磁碗・新羅系土器片・斜格子文を有する瓦片が出土している。第3次調査では、湾曲する中世前半の溝・土壇・ピットを検出している。遺物は、須恵器・青磁碗・土師器坏などが少量出土している。第4次調査では弥生時代中期の溝1条が検出された。第5次調査では、東西方向に流れる時期不明の複数の溝を検出している。溝は、2条ずつセットになって、道路側溝の可能性が指摘されている。（注；福岡市報告書第511集（調査番号9547）は第4次調査として刊行されたが、その後4次調査の番号が重複していたことが判明し（調査番号9148と9547）、現在、これを第5次調査に訂正している。）第6次調査では、中世期の井戸・ピット群が検出された。遺物は、中世の貿易陶磁器・土師器等が出土しているが、いずれも小片である。第7次調査では、中世後半から近世初頭にかけての溝および掘立柱建物・井戸が検出されている。

以上、大橋E遺跡の既往の調査について、検出遺構・出土遺物について簡単に紹介してきた。第5次調査では、道路と推定される遺構が検出され、他の調査でも特に瓦類の出土が多い。瓦は三宅廃寺出土の個体と類似し、三宅廃寺の瓦が流入した可能性が高い。現在の調査結果からは、大橋E遺跡の範囲内にはロームで構成される洪積台地と、シルトで構成される沖積地が含まれており、台地上には弥生前期からの遺構、沖積地には中世前半から遺構がみられ、大橋周辺の開発がこのころ始まったことを示していると思われる。



- | | | | | |
|----------|-----------|-----------|------------|-----------|
| 1 大橋E遺跡 | 11 比恵遺跡群 | 21 臼佐遺跡群 | 31 老司A遺跡 | 41 片江B遺跡 |
| 2 福岡城跡 | 12 那珂遺跡群 | 22 井尻B遺跡 | 32 老司B遺跡 | 42 樋井川A遺跡 |
| 3 鴻臚館跡 | 13 東那珂遺跡 | 23 笹原遺跡 | 33 老司古墳 | 43 樋井川B遺跡 |
| 4 博多遺跡群 | 14 雀居遺跡 | 24 横手遺跡群 | 34 老司瓦窯 | 44 桧原古墳群 |
| 5 吉塚本町遺跡 | 15 那珂君休遺跡 | 25 寺島遺跡 | 35 老松神社古墳群 | 45 桧原遺跡群 |
| 6 堅粕遺跡群 | 16 諸岡A遺跡 | 26 野多目A遺跡 | 36 警弥郷A遺跡群 | 46 柏原K遺跡 |
| 7 吉塚遺跡 | 17 諸岡B遺跡 | 27 野多目B遺跡 | 37 警弥郷B遺跡群 | 47 板付遺跡 |
| 8 駅東生産遺跡 | 18 井尻A遺跡 | 28 野多目C遺跡 | 38 弥永遺跡 | 48 高畑遺跡 |
| 9 榎田遺跡 | 19 三宅廃寺 | 29 野多目D遺跡 | 39 神松寺遺跡 | 49 笠拔遺跡 |
| 10 上牟田遺跡 | 20 三宅瓦窯 | 30 卯内尺古墳群 | 40 片江A遺跡 | |

第1図 大橋E遺跡と周辺の遺跡 (1/50,000)



第2図 大橋E遺跡調査区位置図 (1/4,000)

第1表 大橋E遺跡調査一覧表

調査回数	調査番号	所在地(全て南区)	調査面積(m ²)	調査担当者	報告書
第1次	8641	大橋4-947-5・6	100	小林	219
第2次	8830	大橋4-647-5・6	567	横山	219
第3次	9032	三宅1-1108-2	80	常松	279
第4次	9148	大橋4-1122-4	70	荒牧	未報告
第5次	9547	大橋4-629-3他	530	中村・白井	511
第6次	9852	大橋4-670-8	48	本田	未報告
第7次	0111	大橋4-16-18	425	阿部	740
第8次	0131	大橋4-14-30	152	阿部	791(本書)
第9次	0203	大橋4-6他	830	上角	791(本書)

※報告書第511集は第4次調査となっているが、第5次調査が正しい。

第二章 第8次調査の記録

1. 調査の概要

事業名 都市計画道路長浜太宰府線

所在地 福岡市南区大橋4丁目14-30

調査期間 平成13年10月15日～平成13年11月9日

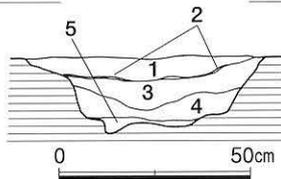
調査面積 151.9㎡

2. 遺構と遺物

検出された遺構は、溝1条・ピット57基である。溝は、南西から北東方向に掘削され、底面に鋤状の工具で掘削したと思われる半月状の小穴が多数検出された。ピットは、一部に現在の生活道路に平行するように、等間隔に並ぶものがみられた。道路予定地内での試掘調査では延長部分は確認できなかったが、ここでは、暫定的に柵列とした。また、SD01溝からサヌカイト製石匙が出土したため遺構面の黄褐色シルトに2mグリッドを組み掘り下げたが、遺物は出土しなかった。また、周辺の道路用地内において試掘調査を行ったが、第9次調査地点の他では遺構・遺物は確認できなかった。

1) 溝 (SD)

H=10.40m



- 1 黒褐色粘質土
- 2 黄褐色シルト質土。地山の土がブロック状に入る
- 3 暗褐色粘質土
- 4 黒褐色粘質土。滞水していた可能性あり
- 5 黒褐色シルト質土

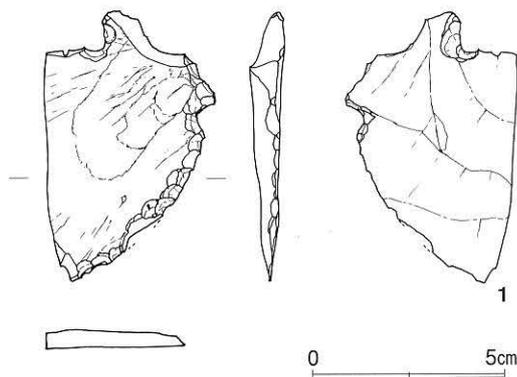
第3図 SD01溝土層断面
実測図 (1/20)

SD01溝 (第3、6図、図版1、2-2)

調査区南半にて検出した。方位は、磁北から36° 東に偏する。ほぼ直線的に伸び、幅52～80cm・深さ20cmを測る。底面には、鋤状の工具で掘削したと思われる、幅10～22cm・深さ2cm程度の半月状の小穴が多数検出された。2列検出され、おおよそ2個ずつ平行に並んでいる。図示した遺物の他に、土師器・黒曜石細片が出土した。

出土遺物 (第4図、図版2-3)

石器：1は、サヌカイト製石匙である。器長7.1cm・器幅4.5cmを測る。横長の剥片を半割し縦型となす。1辺にのみ刃部を作り出し、摘み部基部には、1方向からのみノッチを入れる。未製品か。



第4図 SD01溝出土石器実測図 (1/2)

2) ピット・柱穴 (SP)

57基検出した。植物根状の小穴が多い。

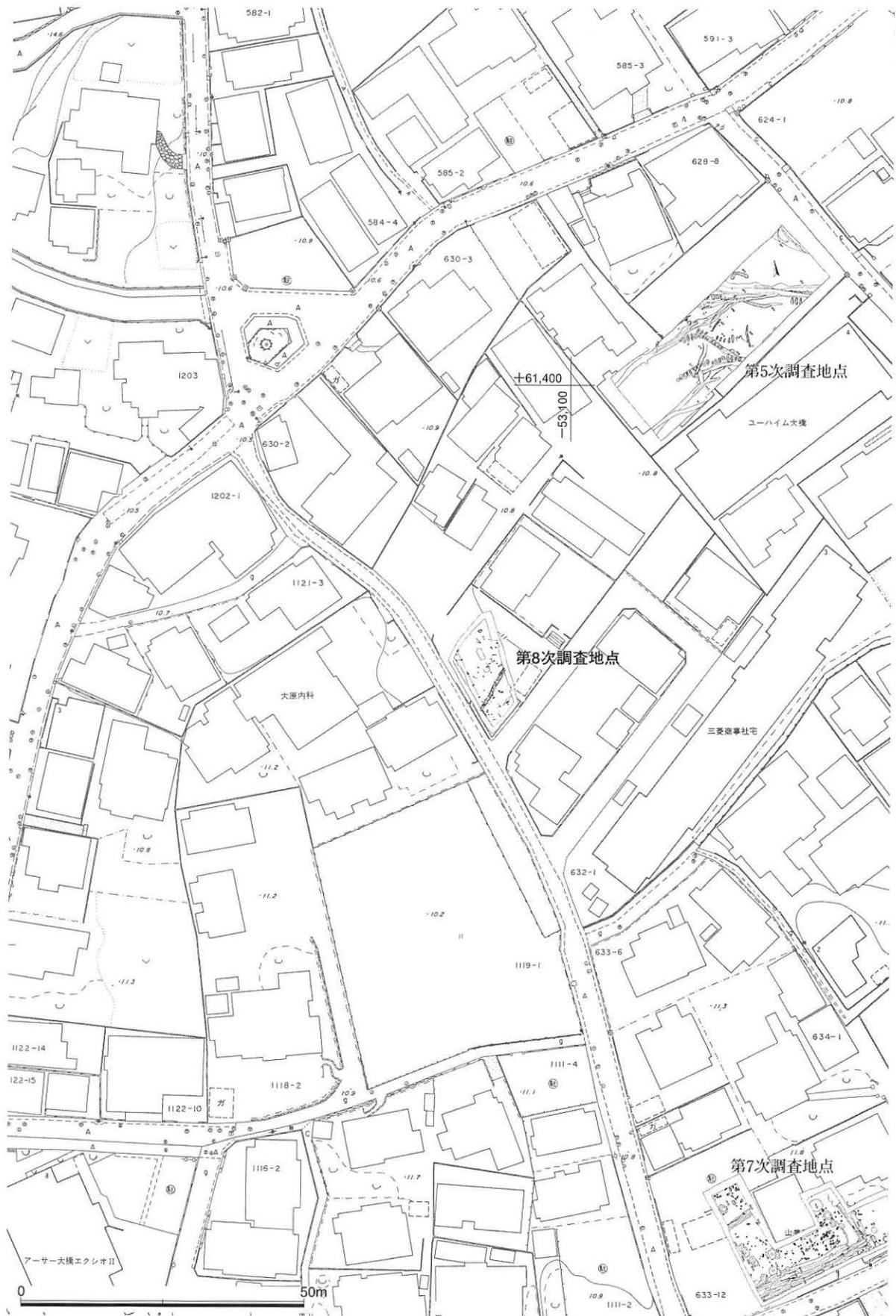
SA02柵列 (第8図、図版1)

調査区西側にて検出した。径26～50cmの柱穴が、2.2～2.7m、狭い箇所では1.2mの間隔で並ぶ。

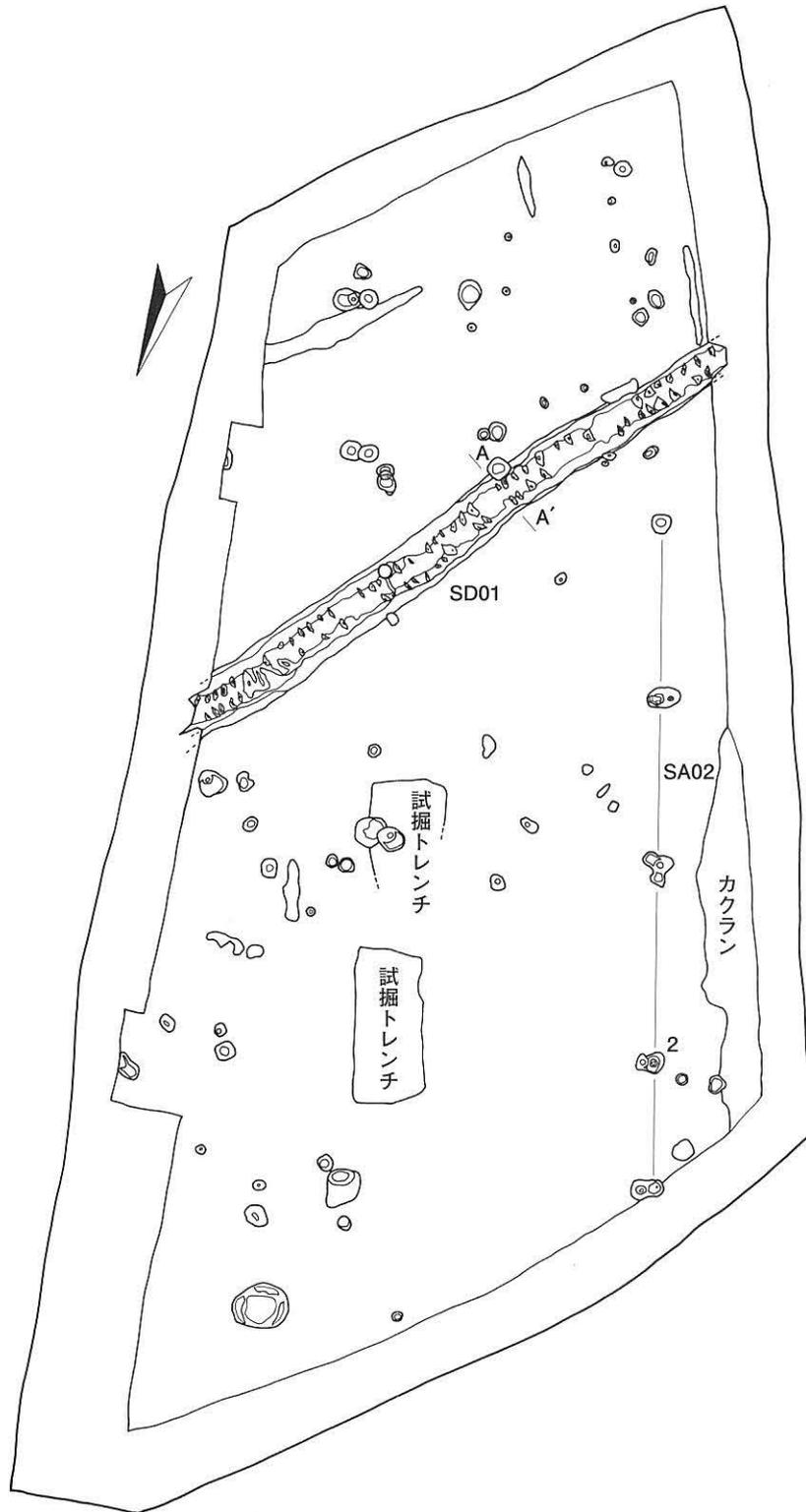
方位は、磁北から19° 西に偏する。

出土遺物 (第9図、図版2-3)

土師器：2は、坏である。4/5個体程度残存する。



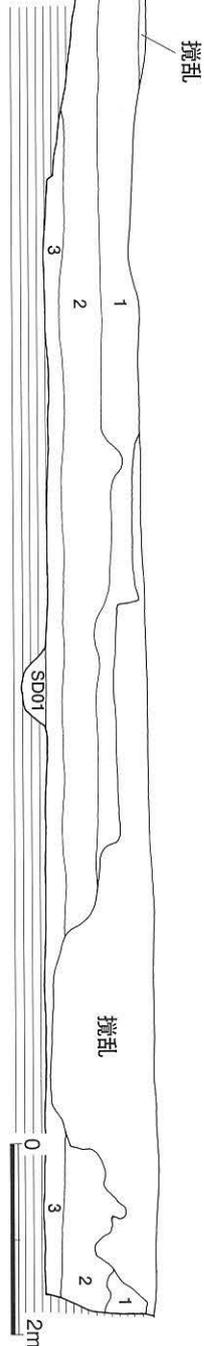
第5図 第8次調査区位置図 (1/1,000)



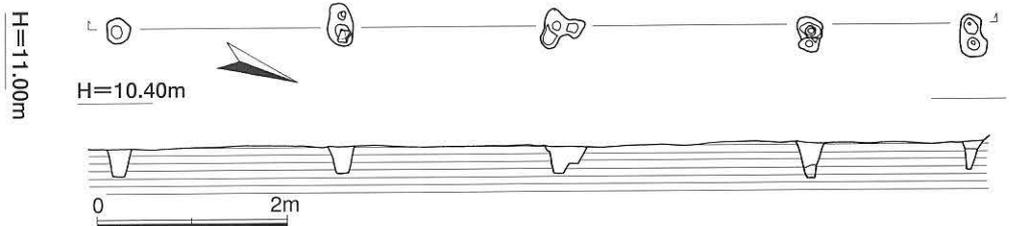
0 5m

第6図 第8次調査区全体図 (1/100)

1 暗褐色土
盛り土、瓦・ガラス類含む
2 明黄褐色砂・盛り土
3 暗青灰色土 旧耕作土

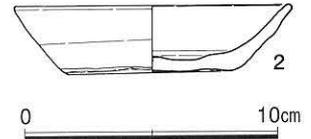


第7図
調査区東壁土層断面
実測図 (1/80)



第8図 SA02柵列実測図 (1/80)

口径10.7cm・器高2.7cm・底径6.5cmを測る。底部には、回転糸切り痕が残る。胎土は精良で、焼成は良好である。



第9図 SA02柵列出土土器
実測図 (1/3)

3) 小結

今回の調査では、溝1条・柵列1条を検出した。溝は、遺物が少なく時期は不明であるが、おそらく古墳時代頃、柵列は、中世前半頃と思われる。

3. まとめ

大橋E遺跡第8次調査の成果については以上の通りである。本調査地において検出したのは、縄文時代から中世に至る遺構・遺物である。調査範囲が狭く、遺構面は大きく削平されていると思われるが、全体的に良好に遺構が検出された。縄文時代の遺物は、サヌカイト製石匙がSD01溝から出土した。溝の時期を示す遺物ではないが、9次調査出土の鍬形鏝とともに、遺構面の黄褐色シルト質土が縄文時代の遺物包含層になる可能性を示している。

一方遺構は、SD01溝の時期は、遺物僅少のためはっきりしない。須恵器が含まれないため古墳時代中期以前かとも思われるが根拠に乏しい。中世の遺構は、ピットの並びを暫定的に柵列と報告している。ピットの中には底部に根石を持つものがあり、すくなくとも柱穴と見なしてよいと思われる。柱穴の1つから土師皿が出土した。14世紀中葉頃か。また、この柱穴列は現在の生活道路に平行している。中世に形成された地割りの方位が、現在も痕跡をとどめているということなのか。

さて、周辺の既往の調査をみても、8次調査区の北東約90mの地点で第5次調査が行われている。旧河川・溝状遺構・畝状遺構などが検出されているが、2条平行して伸びている溝がみられる。報告者は、道路関連遺構の可能性を指摘している。5次調査SD013を延長すれば8次調査SD01に接続しないこともない位置関係にあるが、これに対をなすSD006の延長や、道路に伴う構造が今回の調査で検出できず、溝底面の形状・埋土の構成が双方で大きく異なることもあり、SD01溝をSD013と同一の溝、つまり道路関連遺構とするのは現時点では躊躇される。

第三章 第9次調査の記録

1. 調査の概要

道路建設予定地のうち、土地の取得ができた部分から順次発掘調査を実施しているが、平成14年度には、大橋E遺跡第9次調査として、ここに報告するA区(1,200㎡)、B区(200㎡)の調査を実施した。

調査は平成14年4月1日から同年7月30日にかけて行なった。最初A区のほうから調査をはじめ、半分ほどの面積を調査した段階で、諸事情から一旦A区の調査を中断してB区の調査に移った。B区調査は5月14日から5月30日にかけて実施した。6月からA区調査を再開、7月30日付けで調査を終了した。

A区では760㎡を調査し、中世前期(13世紀頃)と近世(17世紀)の集落跡を発見した。検出遺構は、溝1条と掘立柱建物1棟、土壇12基、柵列1条、細長い性格不明遺構2基、柱穴である。溝は中世のもので幅1.4~3.6m、深さ60~90cmを測る。掘立柱建物は1×2間で良好な遺物が出土していないがおそらく中世のものであろう。遺物は少なくコンテナ3箱の出土に留まる。調査区の北半には近代以降の柱穴列があるだけで古い遺構がまったくない。ここはもともと高かった部分で近代以降に水田を作った際に削平されてしまい、遺構が完全に消失してしまったためと考えている。溝からは弥生時代の磨製石斧2点が混入して出土した。また、中世段階の地山である黄色シルトや褐色粗砂層を一部トレンチ調査したところ、縄文早期から前期にかけての鍬形鏃、黒曜石の剥片、押型文土器があわせて7点出土した。分布があまりに疎であり、周辺から土砂が流れ込み再堆積したものであろう。

B区では、約70㎡を調査し近世の溝2条、土壇2基を検出した。溝はL字型に曲がる。東側隣接地における第7次調査でこの溝の続きが検出されており、溝が方形に巡るようである。その内部空間で掘立柱建物が検出されているので、この溝は屋敷地を巡る区画溝であろう。コンテナ2箱の遺物が出土した。

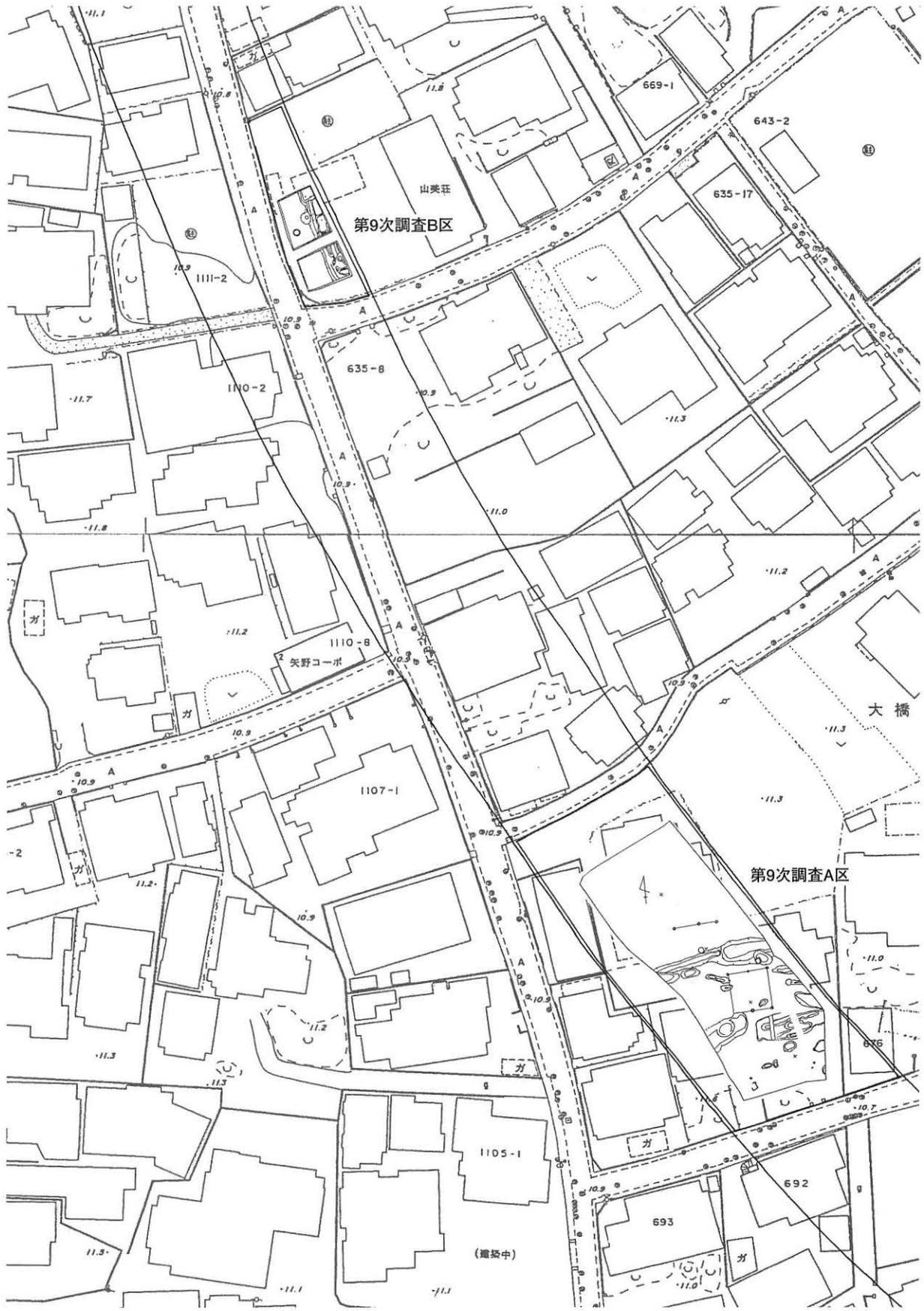
2. A区の調査

1) 中近世の遺構と遺物

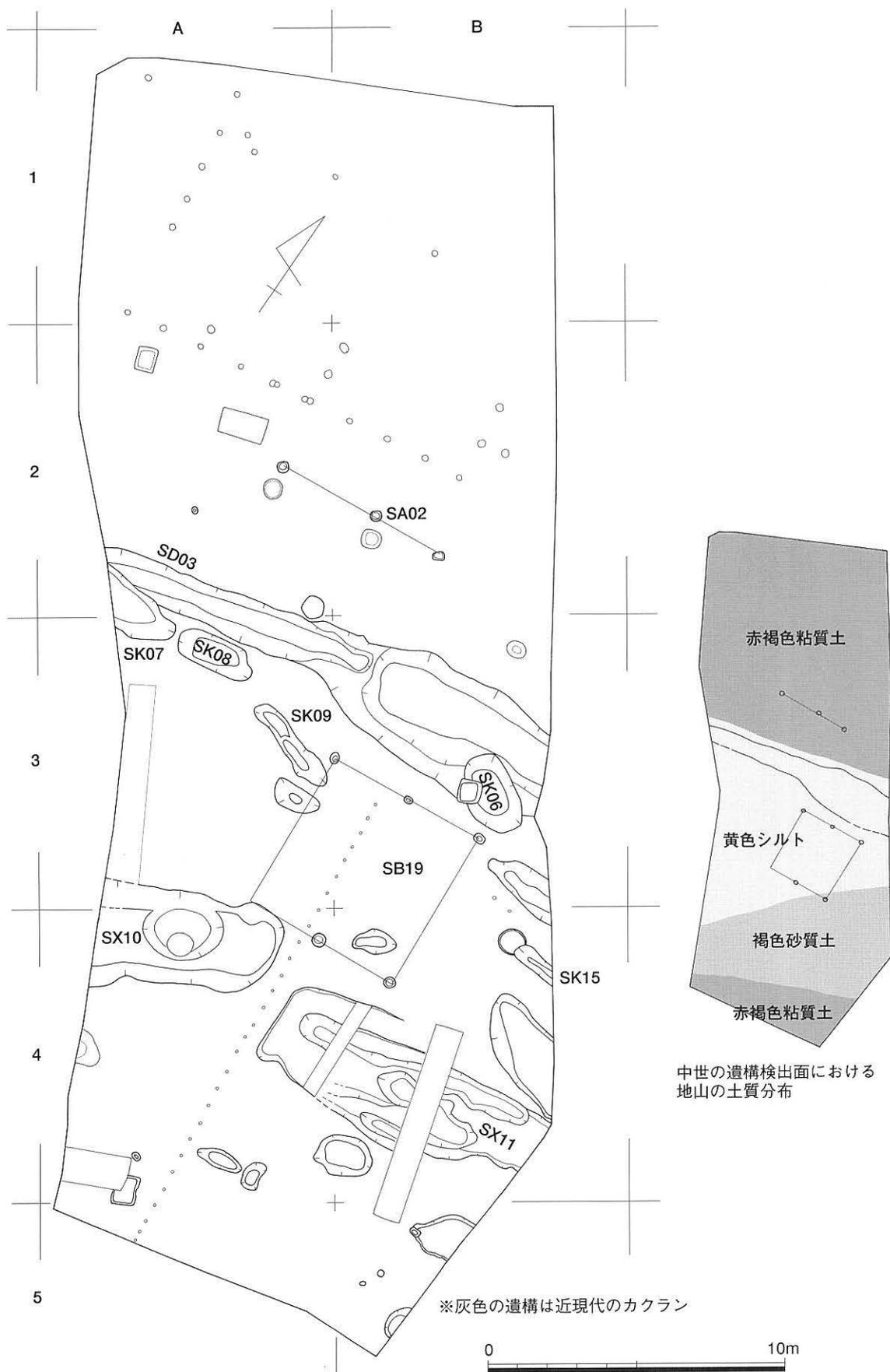
A区では760㎡を調査した。中世遺構面は現地地表下0.6~1.0mの標高10.0m近辺で検出した。遺構検出面はほぼ平坦であり、その直上には水田床土(灰褐色粘土)が20cm程度の厚さで堆積している。それより上は現代の盛土である。本地点は明治33年の古地図で水田であったことが確認でき、近所の古老のお話によっても戦後のごく近年まで水田として利用されていたことが裏付けられた。しかし現在では宅地化がすすみ、周辺では水田、畑地をあまり見ることができない。

本地点においては地山が各所で異なるので、まずその地質的特徴を述べておきたい(第11図)。調査区の北半分と南端の地山は赤褐色~明黄褐色の粘質土であり、それに挟まれる部分に北側を黄色シルト、南側を褐色砂質土が帯状に占めている。一部を深掘りしてそれらの層序を確認したところ①赤褐色粘質土→②褐色砂質土→③黄色シルトの順で堆積しており、②、③の下に灰白~灰褐色の砂礫層を確認している。

調査区北半の地山(赤褐色粘質土)上では近現代の攪乱しか検出されていないが、直上の水田床土との分層ラインが凹凸をもたずにほぼ直線的であることを考えると、比較的新しい時期(近代以降か)に水田を造成した際、元来高かったこの部分を削平した可能性が高い。重機での表土剥ぎ取りに立ち会ったが水田床土からの遺物の出土は認められなかった。



第10図 第9次調査区位置図 (1/800)

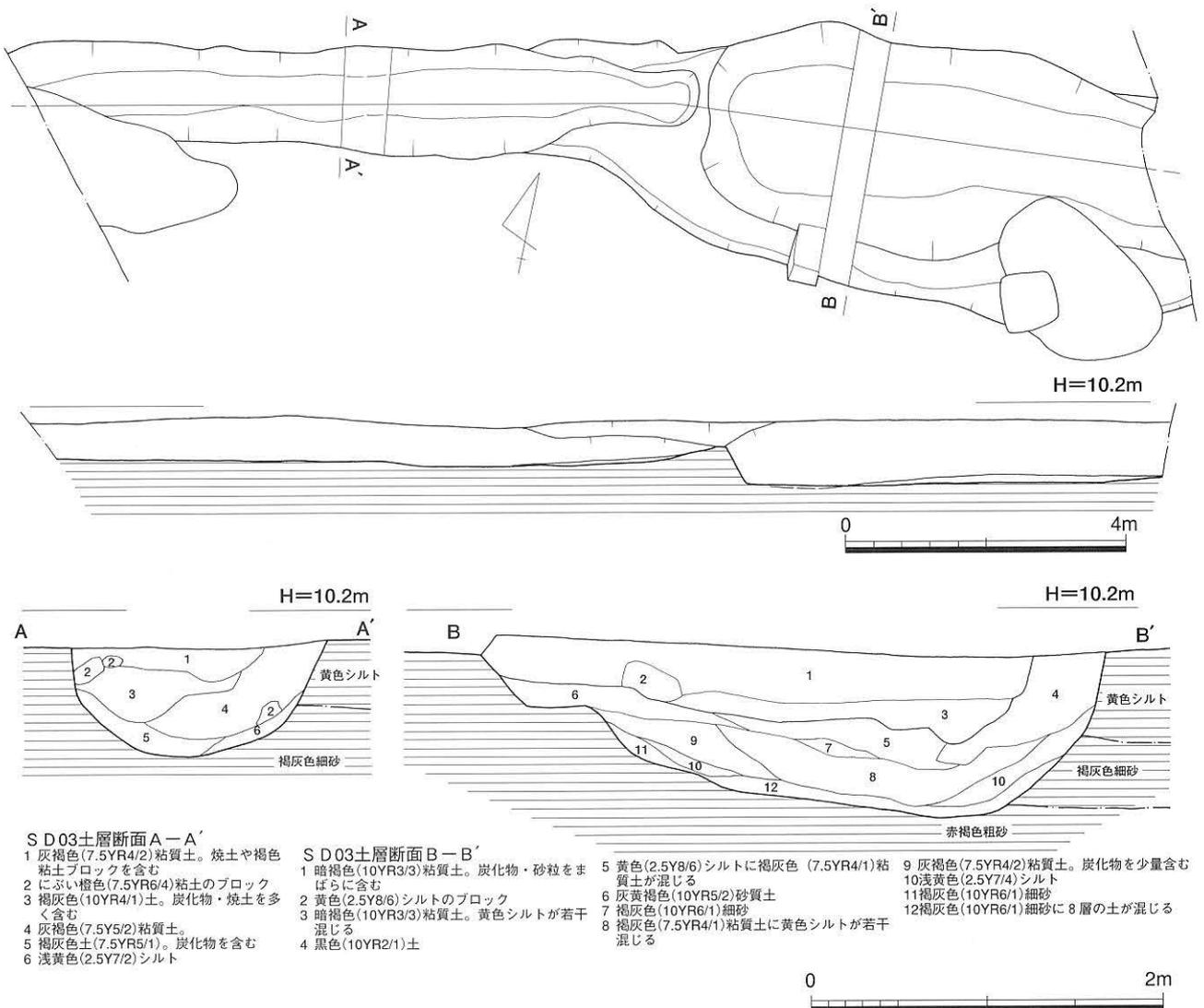


第11図 大橋E遺跡第9次調査A区 遺構配置図 (1/200)

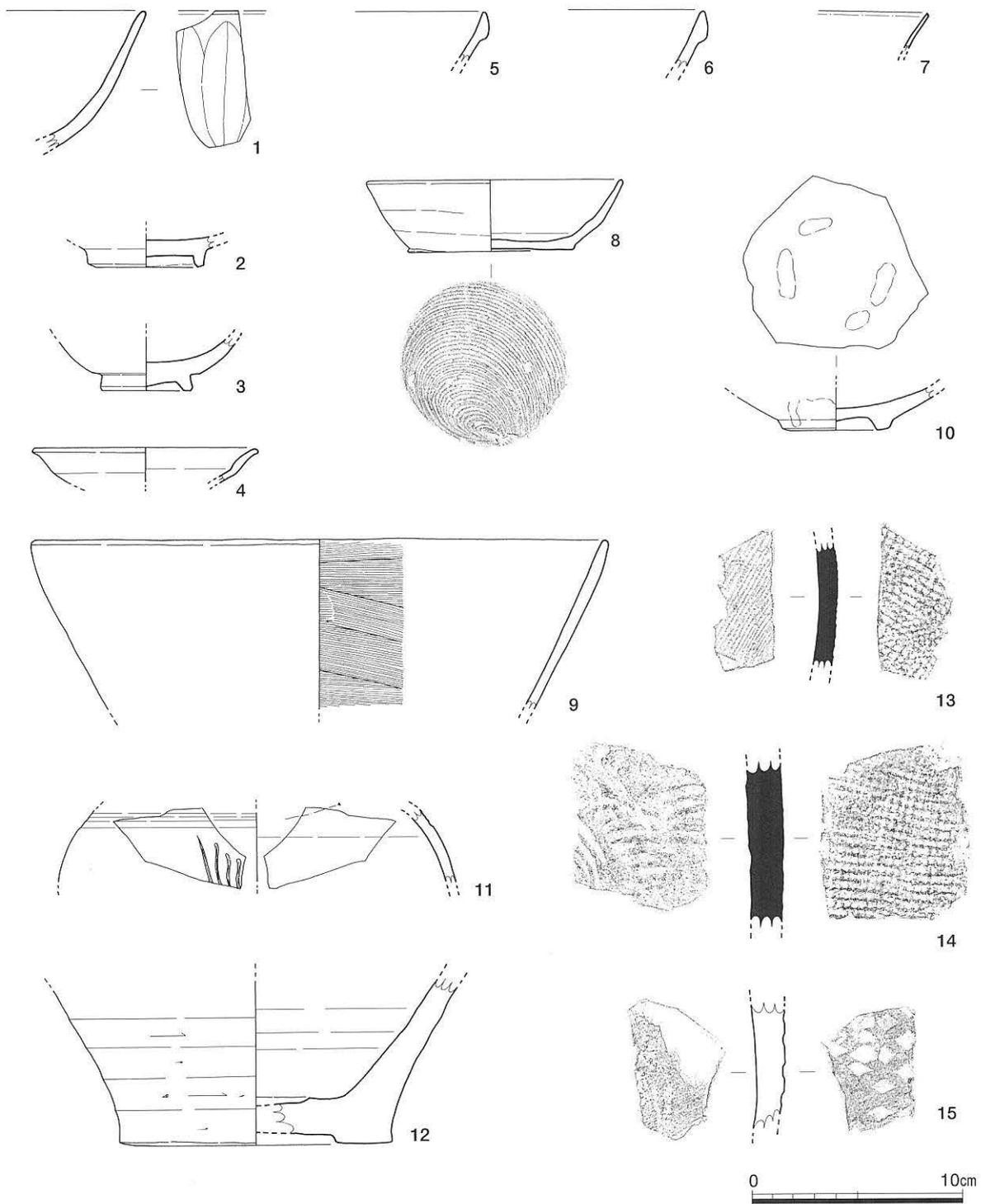
この遺構面で中近世の遺構を検出した（第11図）。以下にその主要なものについて報告する。

SD03（第12図）

調査区の中央を東西に横断する溝である。図中央を境に東西で溝の幅も深さも大きく異なり、土層図に見るように埋土堆積状況も異なる。西側が幅1.6m、深さ60cm、東側が3.6m、深さ90cmを測る。実際、遺構検出時に東西の埋土の間に切り合いを認め、調査段階では西側をSD03、東側をSD04として記録した（先後関係はSD03→SD04）。しかし、はじめからある溝SD03が調査区途中で途切れていたとするのは不自然である。また、遺物の検討からも両者はほぼ同時期に位置づけられ、相互の関連性がないとは考えづらい。よって、SD03の東半分だけが当初よりも深く幅広く拡幅されたものと考え、整理段階でSD03に統一した。ただ、検出面で切り合いが確認できるということは東西で埋没時期が異なることを示すのであろうから、SD04が拡幅され利用されていた時期には西側はすでに埋められていたことになろうか。実態がよく分からない。東側の土層B-B'の1~3層は上に乗っていた別遺構の埋土の可能性もある。ちょうど地山が赤褐色粘土から黄色シルトに変わるライン上に



第12図 SD03実測図（1/100、1/40）



第13図 SD03出土遺物実測図 (1/3)

位置する点も気になるが意味があるのであろうか。

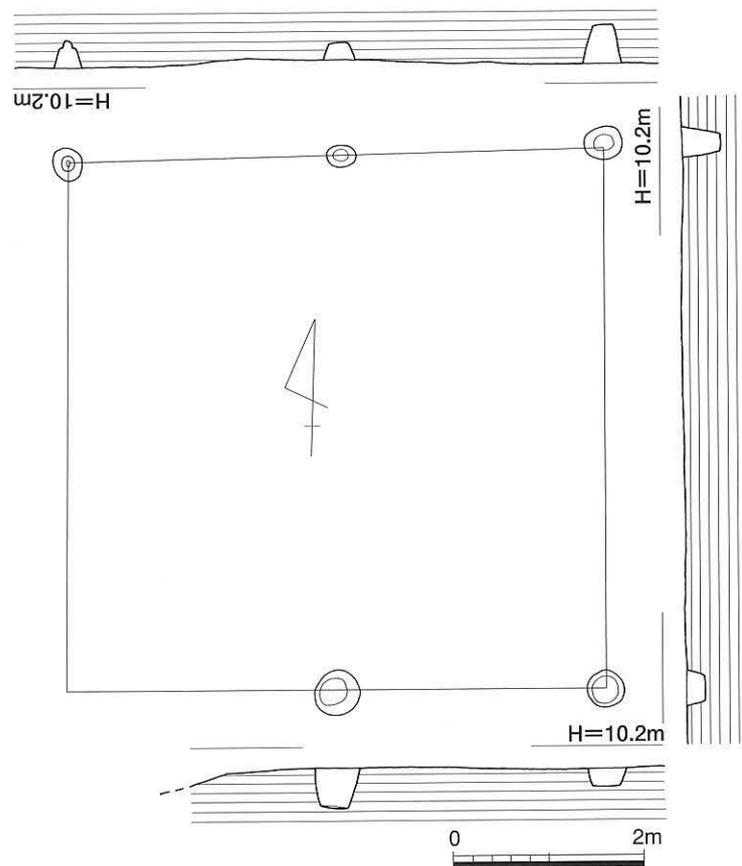
出土土器 (第13図)

1～4は青磁である。1は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類の口縁部である。外面に鎬連弁文を施し、釉調は明緑灰色を呈する。2は碗の底部である。高台内は露胎で内面見込みに花文を描くようだが不明瞭である。底径5.6cm。3も青磁碗の底部である。焼成不良で高台の付け根がわずかに緑に発色するのみである。

とは白濁する。体部は丸みが強い。底径4.4cm。近世の混入品。4は同安窯系青磁皿Ⅰ類である。復元口径10.8cmを測る。5～7は白磁である。5、6は白磁碗Ⅳ類の玉縁口縁の破片である。7は口禿げの碗Ⅳ類の口縁部片である。8は土師器の坏である。完形品で口径12.3cm、器高3.5cm、底径8.0cmを測る。底部は糸切りで灰白色を呈する。9は土鍋である。復元口径27.6cmを測る。胴部から口縁部にかけてまっすぐに開き、内面は横刷毛を施す。外面には煤が付着する。10～12は陶器である。10は皿の底部で、底径5.4cmを測る。灰褐色釉は融解不良で外面は露胎である。見込みには4つの砂目跡を有する。近世の混入品。11は壺の肩であろうか。外面に横位の稜線数条と縦方向の線刻がある。器壁が薄く胎土は赤橙色で外面と内面上方に黒褐色釉が掛かる。12は壺の底部である。底径は13.0cmで、外面はケズリ、内面はナデ調整し、底面は中央部を5mmほど削る。赤灰色を呈しよく焼け締まる。13は須恵器の壺胴部片である。外面は格子叩き、内面は刷毛目である。14は須恵器の甕胴部片である。外面に細かい格子叩き、内面に同心円文の当て具痕が残る。15は瓦である。外面は幅広の斜格子、内面には布目痕跡が残る。非常に硬く焼けており黒褐色を呈する。出土遺物はかなりの時期幅をもつが、近世の遺物は直上の別遺構の遺物を混ぜて取り上げてしまったもののようなものである。遺構の時期は中世前期に位置づけられる。

SB19 (第14図)

調査区中央のSD03の南側で検出した掘立柱建物である。図上で復元した。桁行2間(5.9m)、梁間1間(5.8m)を測り、主軸方向はほぼ東西(N-88°-E)を示す。西南隅の柱穴はSX10にかかり検出できなかった。柱穴は径20～25cmと小さい。遺物は出土していないが、SD03と軸方向がほぼ同じであり、おなじ中世前期の時期を当てたい。



第14図 SB19実測図(1/80)

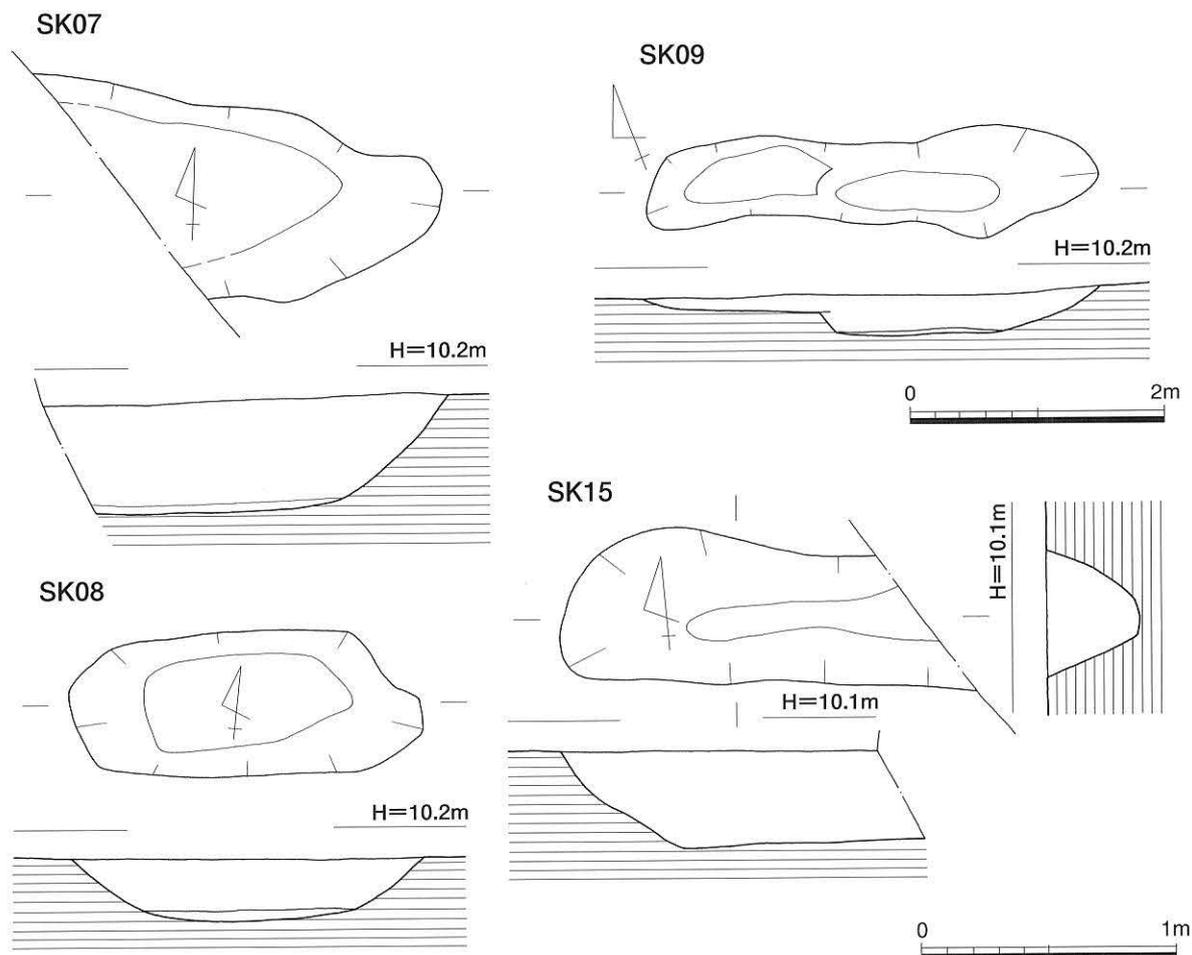
SK07 (第15図)

調査区中央のSD03のすぐ南側で検出した。西側は調査区外に延びており、検出長3.2m、幅1.8m、深さ85cmを測る。埋土は灰褐色土である。

出土土器 (第16図)

16は白磁の皿である。口径14.0cm、器高3.5cm、底径4.8cm

を測る。口縁部は輪花に仕上げ、見込みの釉を幅広く輪状に掻き取る。底面は畳付のみ無釉。17は色絵の小坏である。外面に朱色の釉を掛ける。高台内に染付で方形の銘を記すがぼやけていて読めない。近世の遺構である。



第15図 SK07・08・09・15実測図 (1/60、1/30) ※SK15は1/30、ほかは1/60

SK08 (第15図)

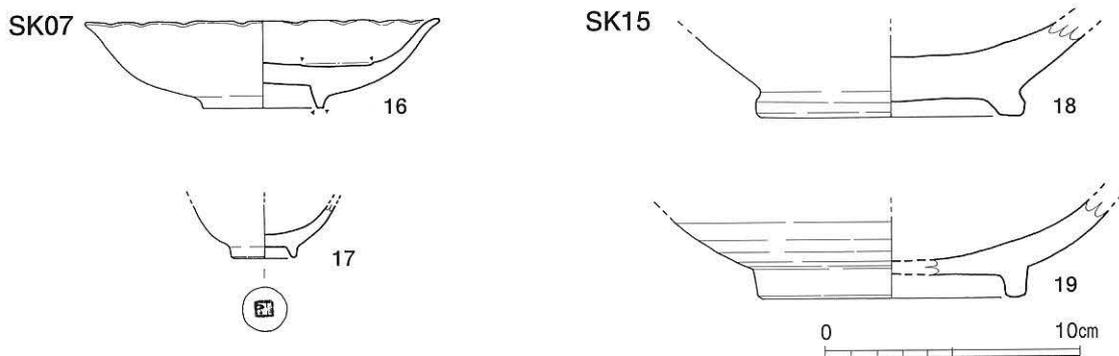
S D03のすぐ南、S K07の東側に並んだ長方形の土壇である。長さ2.8m、幅1.3m、深さ50cmを測る。埋土は灰褐色土である。

SK09 (第15図)

S K08の東側で検出した。長さ3.5m、幅0.8m、深さ35cmを測る。

SK15 (第15図)

調査区南よりの東端で検出、東側は調査区外へ延びる。検出長1.6m、幅0.6m、深さ40cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。



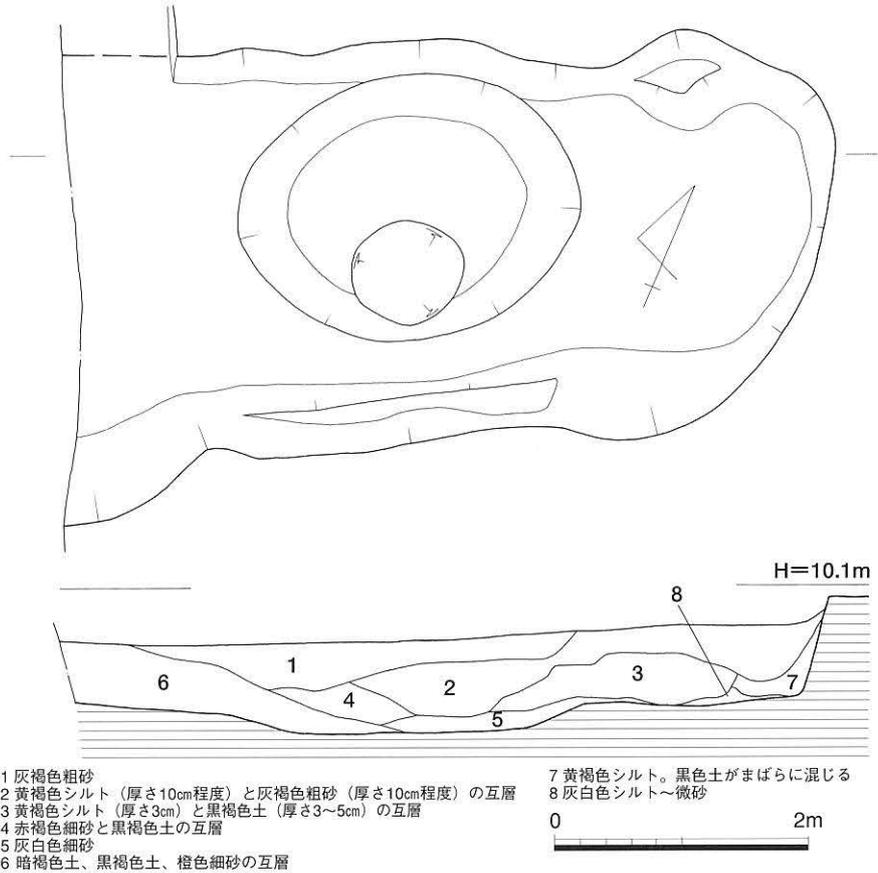
第16図 SK07・15出土遺物実測図 (1/3)

出土土器 (第16図)

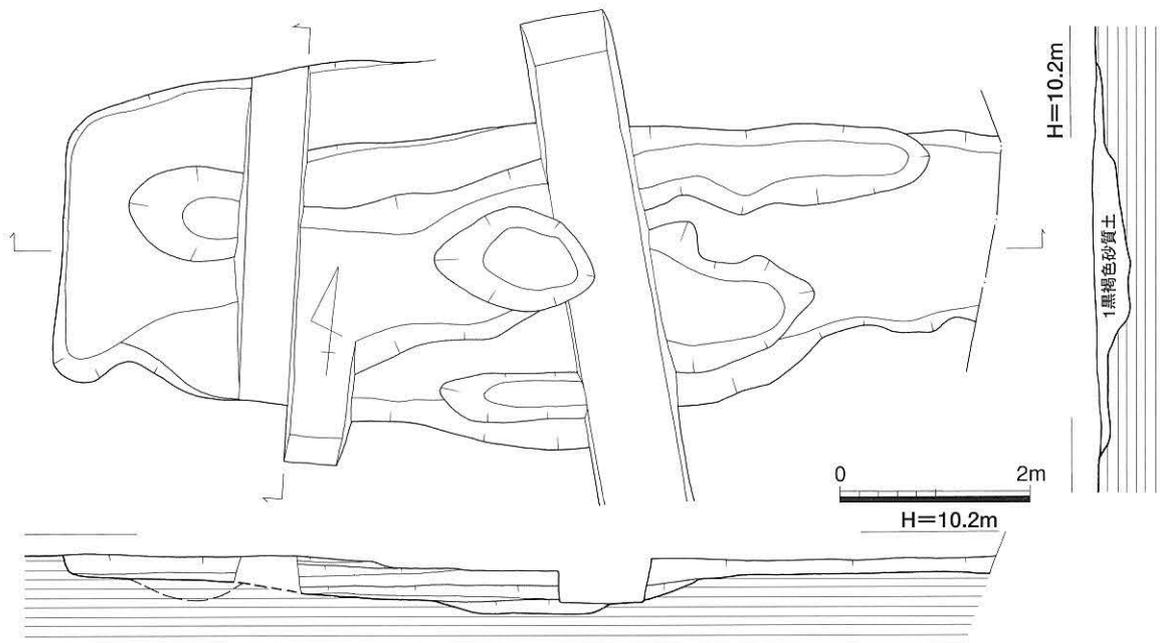
18、19は陶器の底部である。18は底径10.6cmで、胎土は赤褐色、焼成不良で釉は白濁する。19は底径10.6cmで外面を回転ヘラケズリする。内面に赤灰色釉を掛け、外面は露胎である。

SX10 (第17図)

調査区南側で検出した細長い遺構で、西側は調査区外に延びる。幅3.2m、検出長6.3m、深さ80~100cmを測る。この部分の地山は黄色シルトで、遺構埋土は灰白~褐色系の砂層やシルト層が複雑に堆積している。砂とシルトが細かく互層に堆積している部分が多く、水流の跡を示すものか。性格不明の遺構である。

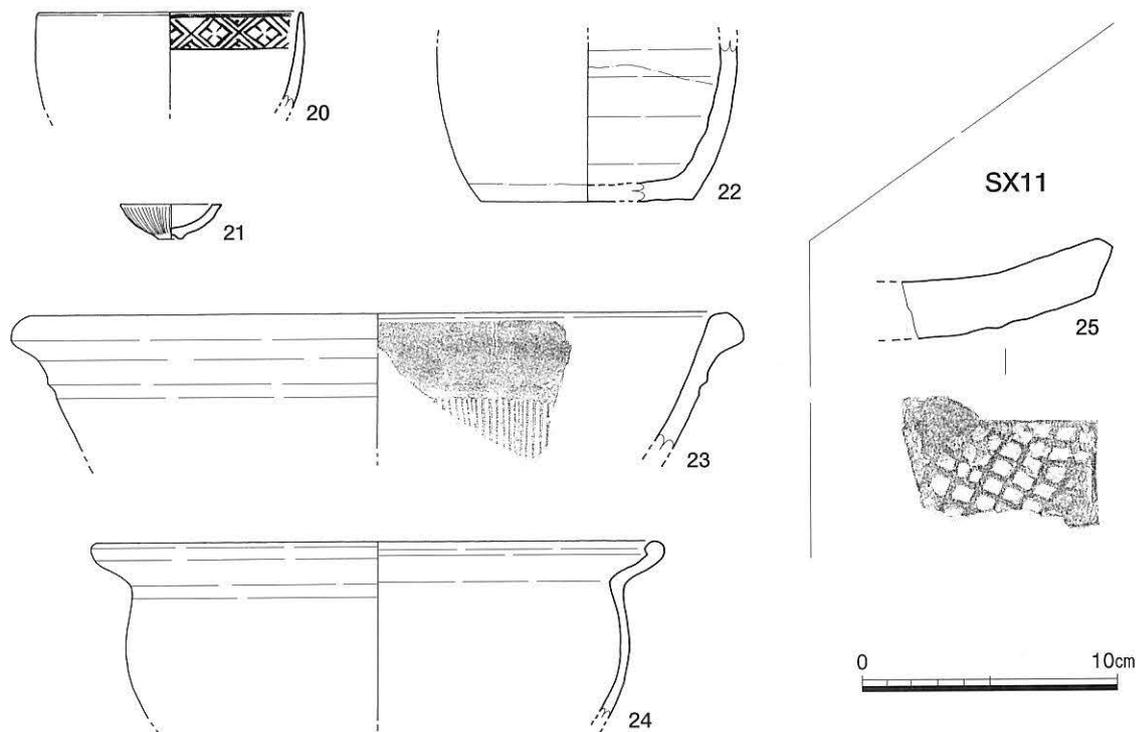


第17図 SX10実測図 (1/60)



第18図 SX11実測図 (1/80)

SK10



第19図 SX10・11出土遺物実測図 (1/3)

出土土器 (第19図)

20は肥前の青磁染付碗である。外面には青磁釉をかけ、口縁部内面に四方襷文を描く。復元口径10.6cmを測る。1760～1780年代。21は白磁の紅皿である。口径4.0cm、器高1.4cm、底径1.0cmを測る。22～24は陶器である。22は瓶の底部であろう。底径8.4cm。外面と内面上位に褐色釉を掛ける。23は摺鉢である。復元口径29.0cmで、釉は掛からず赤褐色を呈する。24は鉢か。口径22.6cmを測り、全体に褐色釉を掛ける。出土遺物より遺構の時期は18世紀後半頃に位置づけられる。

SX11 (第18図)

調査区南側で検出した細長い遺構で、東側は調査区外に延びる。幅2.2～3.6m、検出長9.8m、深さ40～60cmを測る。埋土は黒褐色砂質土で黄褐色シルトブロックを含む。平面形、底面とも不規則である。何らかの目的を持って人為的に掘られたものか不明である。

遺構の配置を見ると、先述のSX10とこのSX11は間に陸橋状の部分をもつ1本の溝のようにも見え、ちょうどその陸橋部分では南北方向に続く柵列が検出されている。柵列は径10cm程度の小ピット28基がほぼ等間隔で並んでいる。時期は不明であるが、その方向は現在の周辺のいずれの道路の向きとも一致しない。これらの遺構が相互に関連するのであれば興味深いが、埋土の状態が違うし、いかがであろうか。

出土土器 (第19図)

25は平瓦である。凸面に斜格子叩きが残る。凹面は磨滅する。

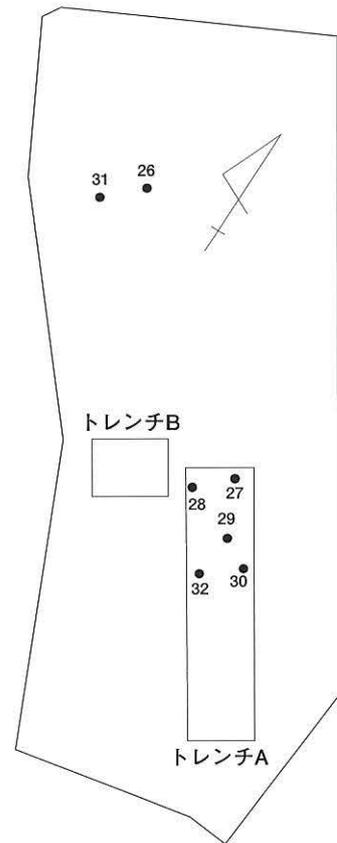
2) 縄文・弥生時代の遺物

中近世の遺構面を調査中に、たまたま縄文時代早期の鍬形鏃の完形品が出土した。調査区北側の赤褐色粘質土が所々染み状によごれてすこし暗い色になっていたので、掘っていたところ、そこから出土したのである。それから同様な部分を掘ると黒曜石の剥片が1点出土した。調査工程の都合から、

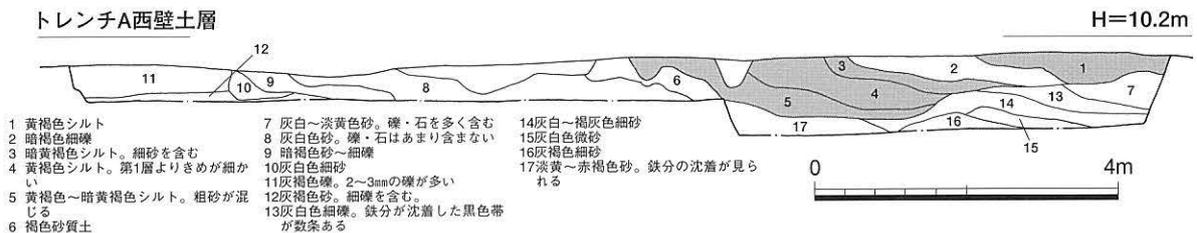
この調査区北側を調査後、排土を反転して南側の遺構面を精査し、その後、トレンチを設定して縄文時代の遺物および包含層の確認をすることにした。結果的には調査区の南北で地山の地質が異なっていたため、北側にもトレンチを入れておけばよかったと残念に思う次第である。トレンチは第20図のように2ヶ所に設けた。トレンチAは14.5×3.5mの面積で、地山が黄色シルトの部分から褐色砂質土の部分にかけて縦断するように設け、その層序関係の把握に努めた。深さ50～100cmを掘り下げ、黄色シルトおよびその直下の流水成の灰白色砂層から黒曜石剥片4点、押型文土器の小片1点が出土した。トレンチAの西壁土層図（第20図）に示すように、北側の黄色系シルトの下に褐色系の砂質土がもぐりこんでいる。また、4×3mのトレンチBも設けたが、こちらからは何も出土しなかった。

遺構面およびトレンチAから出土した縄文時代の遺物と、中近世の遺構に混入していた弥生時代の遺物を第21図に報告する。

26～31は黒曜石の石器である。いずれも西北九州産で、26・31は牟田産、27・28・30は針尾島産である。29は漆黒で光沢がある。26は鍬形鏃である。縄文時代早期中頃のもので未欠損である。27は破片で一部自然の礫面が残る。28・29は細石刃である。30・31はチップである。32は押型文土器である。33は弥生土器の壺の底部である。34は蛤刃磨製石斧である。33・34はS D 03に混入していた。



※数字は遺物掲載番号



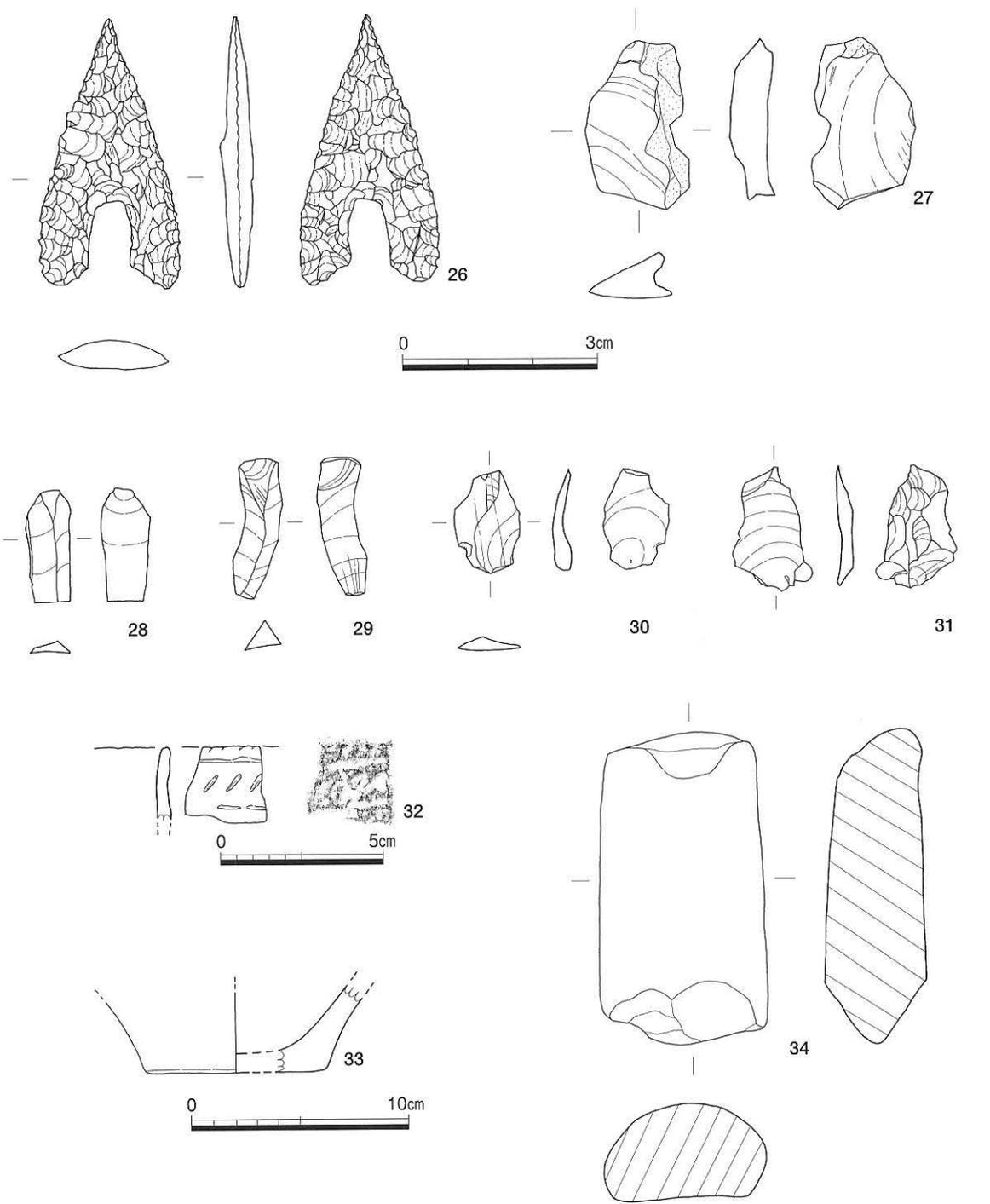
第20図 縄文時代包含層 トレンチの位置と土層 (1/400、1/100)

3) 小結

A区では760㎡を調査し、中世前期（13世紀頃）と近世（17世紀）の集落跡を発見した。検出遺構は、溝1条と掘立柱建物1棟、土壇12基、柵列1条、細長い性格不明遺構2基、柱穴である。遺物は少なく調査区全体でコンテナ3箱の出土にとどまる。

溝S D 03、掘立柱建物S B 19、柵列S A 02は主軸方向をほぼ東西（N-88°-E）にとり、同時期の相互に関連ある遺構と考えられる。溝出土遺物の年代から、これらの遺構の時期は中世前期である。溝は東西で幅、深さ、埋土堆積状況が異なり、検出面で切り合いを確認した。溝が一度埋没した後に東半分だけ掘り直したということになるうか。

調査区北半では地山の赤褐色粘質土が露出しており古い遺構は皆無である。本調査区は遺跡の中央部に位置しており、後世に削平を受け完全に消失したものと思われる。また、この遺構分布の差異と



26~31は1/1、32は1/2、33・34は1/3

第21図 縄文、弥生時代の遺物実測図（1/1、1/2、1/3）

対応するように、地山の特徴も調査区の南北で異なっている。すなわち、北側の赤褐色粘質土がおそらく洪積台地の土であるのに対して、南側では沖積作用による黄色シルト、褐色砂質土が分布する。遺物では、中世より古い時期のものが出土している。遺構検出面および地山に設けたトレンチから縄文時代早期の黒曜石の鋳形鏃、細石刃、剥片が出土している。とくに鋳形鏃は完形品で重要である。押型文土器の口縁部小片1点も出土した。また、弥生時代の土器、石斧がごく少量出土した。

3. B区の調査

1) 近世の遺構と遺物

B区は開発面積210㎡であるが、使用中の埋設管が多くあるため、やむを得ず調査面積を70㎡に大きく縮小した。現地表下90cmの標高10.0m付近の暗褐色粘質土層の上面で遺構を検出した。遺構検出面は平坦で直上には25cmの厚さで水田床土（灰色粘土）が堆積する（第23図）。明治33年の古地図ではここは水田になっている。これより上は現代の盛土である。

本調査地点の東側隣地で第7次調査が行なわれており、15世紀代から近世初頭にかけての遺構が検出され、掘立柱建物と井戸がセットとなり、その周囲を溝が圍繞する屋敷地と考えられている。

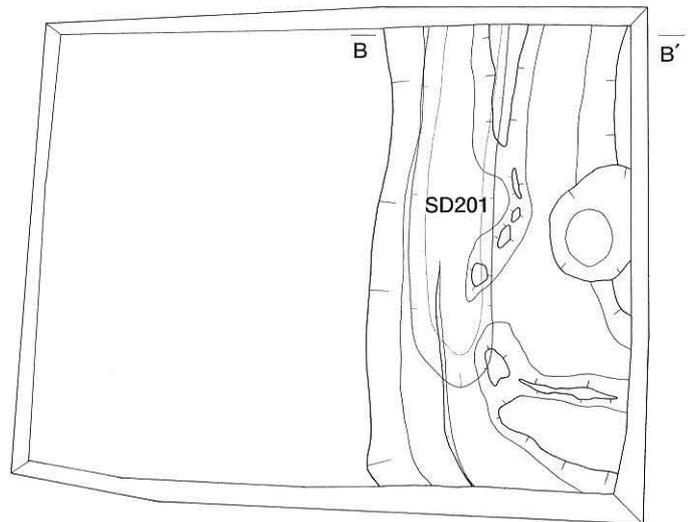
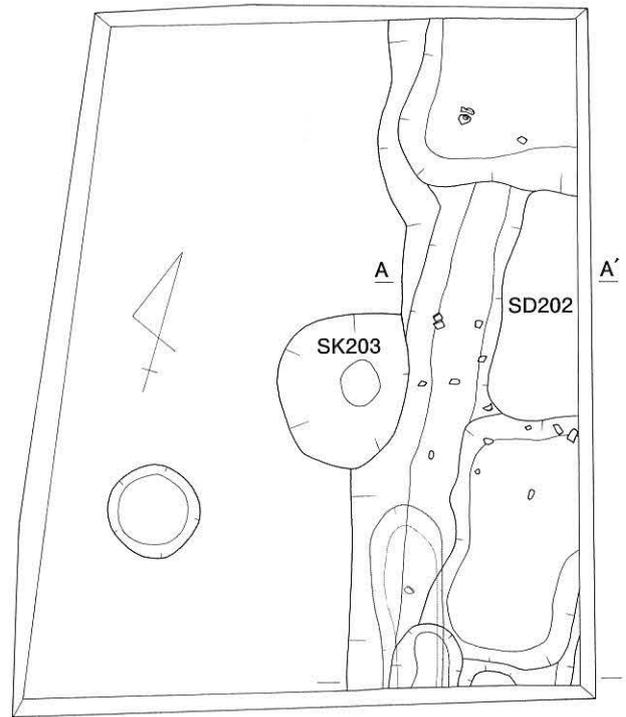
本調査区で検出された遺構は近世の溝2条、土壇2基である。

SD201（第22・24図）

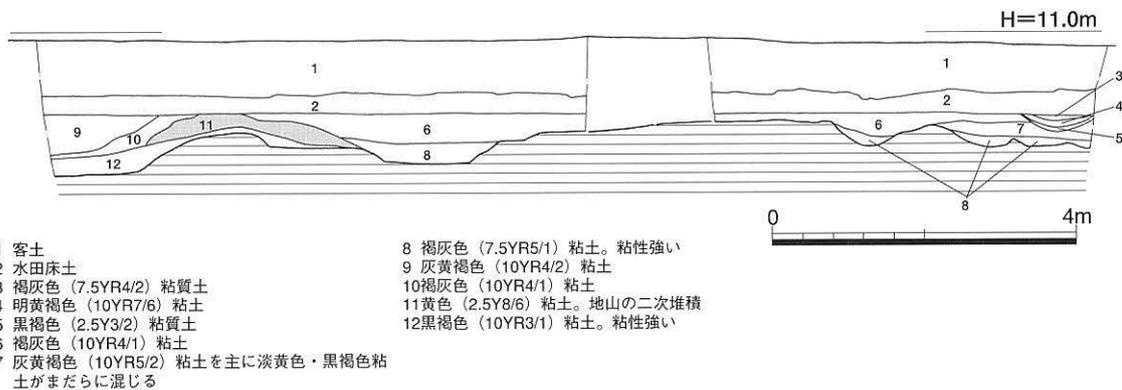
SD202の真上を同じ方向に走る溝である。幅80cm、深さ20cmで約7.5mの長さを検出した。埋土はにぶい黄褐色土である。

出土遺物（第26図）

35は陶器の皿である。釉調は緑オリーブ色で、底部から体部下半にかけて露胎である。見込に4つの目跡がある。底径5.0cmを測る。36は土師質の播鉢である。内面は右下がりの刷毛目を施したあと播目を入れる。復元口径30.8cm。



第22図 大橋E遺跡第9次調査B区 遺構配置図（1/80）



第23図 B区東壁土層実測図（1/100）

SD202 (第22・24図)

調査区の東側半分を南北に縦断する溝である。東側の肩はおおかた調査区外にあるが、南側調査区で一部両肩を検出している。その部分で幅2.4mを測る。検出面からの深さは約50cmで、底面は凹凸が激しく、埋土の堆積状況から見ても何度か掘り直しているようである。調査区の東壁土層に注目したい(第23図)。北側の中ほどに地山の二次堆積である黄色粘土(第11層)が堆積している。この土は溝を横切るように分布しており、中央が高く南北に傾斜して落ちていく。おそらく溝のこの部分に陸橋状の通路が設けられたものではないか。この層の下に黒褐色土層があるので、溝の開通より後の段階で作り足されたものと考えられ、この盛土の両側斜面で土器が集中して出土した。

出土土器 (第26図)

37~40は陶器の碗である。37・39・40は灰白色釉、38は濃緑色釉を掛ける。41、42は青磁である。41は碗の底部で見込にスタンプ文を押すが判読できない。42は蛇の目凹型高台の皿である。43は土製の火鉢である。外面に花文等のスタンプを押す。内面および口縁部外面に煤が付着する。復元口径12.0cm、器高5.8cm、底径10.0cmを測る。44、45は土鍋である。45は復元口径32.2cmを測る。46、47は平瓦である。凸面に格子目叩き、凹面に布目痕が残る。

SK203 (第25図)

略円形の土壇で、SD202を切っている。径1.8m、深さ40cmを測る。

出土遺物 (第26図)

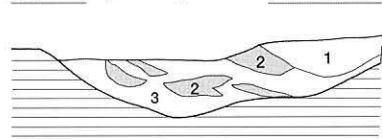
48は肥前染付の小碗である。口径5.0cm、器高4.4cm、底径3.7cmを測る。底面に「大明」の銘を有する。49は肥前陶器の播鉢である。褐色釉を掛ける。

2) 弥生・古墳時代の遺物

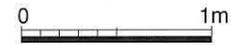
少数であるが近世の溝から弥生・古墳時代の遺物が混入して出土している。第27図50、51は磨製石斧である。52は須恵器の甕の口縁部である。53は須恵器の坏である。54は須恵器の高坏の脚部である。縦長の透かしを設ける。50~53はSD202、54はSD201から出土した。

SD202土層A-A' (南から)

H=10.0m

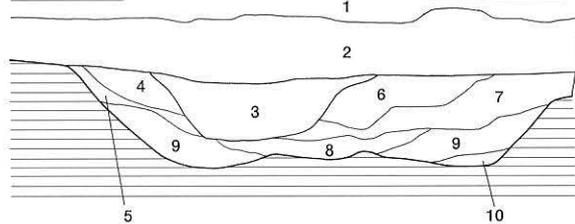


- 1 黄橙色(10YR7/8)粘土
- 2 黄色(2.5Y8/6)粘土のブロック
- 3 黒褐色(10YR3/2)粘土



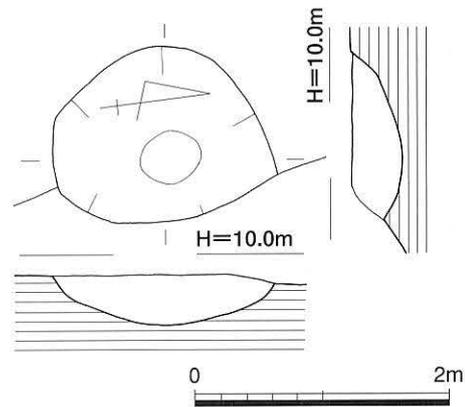
SD201・202土層B-B' (南から)

H=10.3m



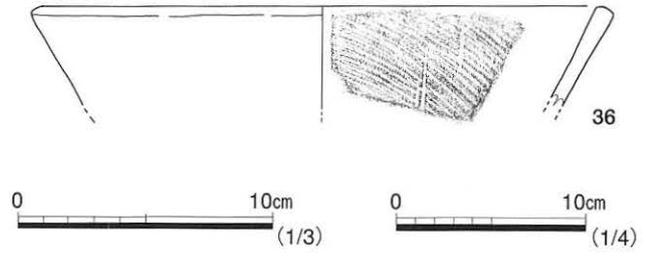
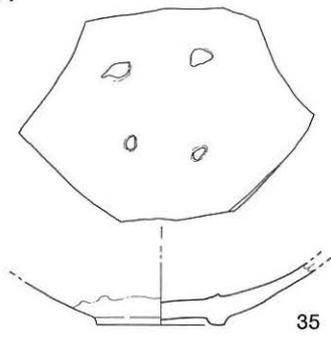
- 1 盛土
 - 2 水田床土
 - 3 にぶい黄橙色(10YR5/3)粘土
 - 4 灰黄褐色(10YR5/2)粘質土。黄橙色粘土ブロックを含む
 - 5 灰黄褐色(10YR5/2)粘質土
 - 6 褐灰色(7.5YR4/1)粘質土
 - 7 灰黄褐色(10YR4/2)粘土
 - 8 褐灰色(10YR6/1)粘土。粘性強い
 - 9 黒褐色(10YR3/2)粘土。粘性強い
 - 10 褐灰色(10YR6/1)粘土。粗砂が混じる
- ※3: S D201埋土、4~10: S D202埋土

第24図 SD201・202土層実測図 (1/40)

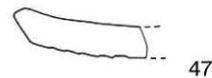
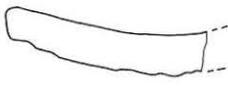
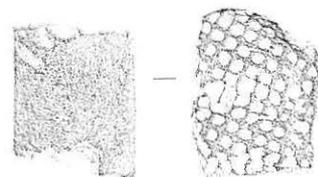
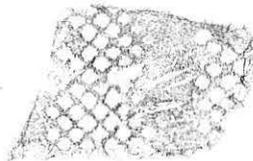
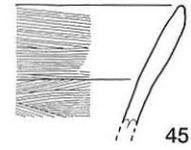
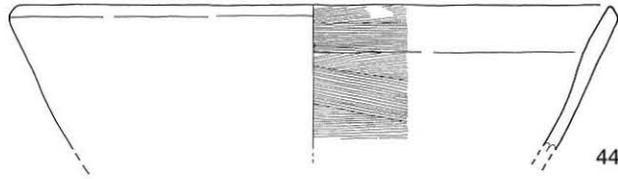
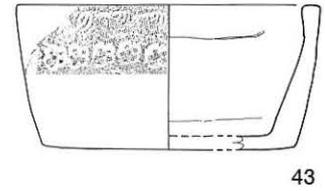
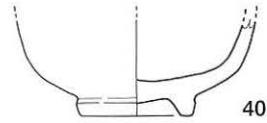
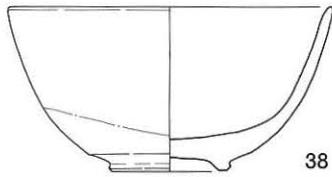
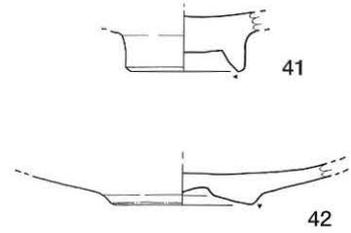
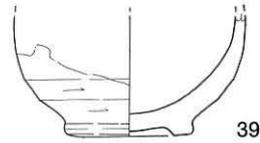
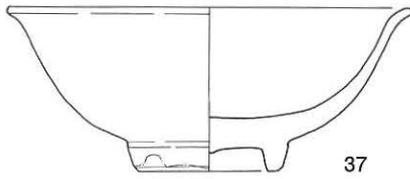


第25図 SK203実測図 (1/60)

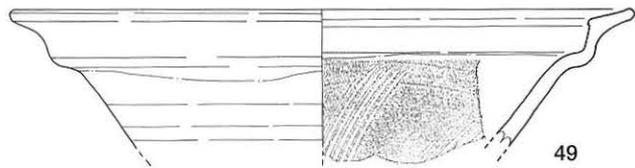
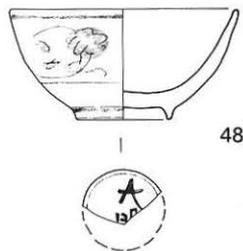
SD201



SD202

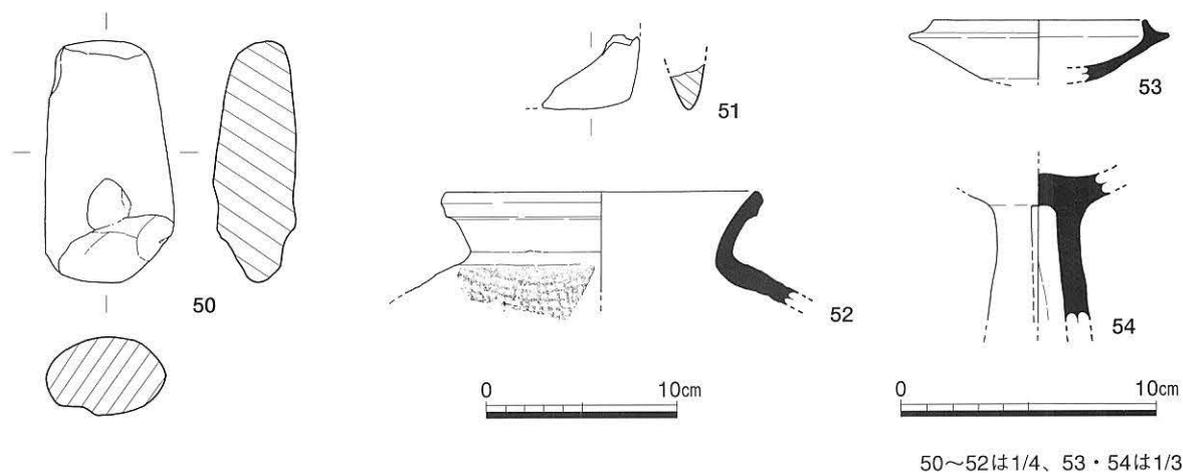


SK203



36・44～47は1/4、ほかは1/3

第26図 SD201・202、SK203出土遺物実測図 (1/3、1/4)



第27図 弥生、古墳時代の遺物実測図（1/3、1/4）

3) 小結

B区では70㎡を調査し、近世の溝2条、土壇2基を検出した。

本調査区の東側隣接地で第7次調査が行なわれている。その成果と照合して遺構の性格について述べることにしたい。第28図が本調査区と第7次調査区の遺構配置図の合成図である。第7次調査報告書によれば、ここでは15世紀代から近世初頭にかけての遺構が検出され、掘立柱建物と井戸がセットとなり、その周囲を溝が圍繞する屋敷地と考えられている。

今回検出した溝S D202は第7次調査の溝と軸方向を同一にしており、まさしくこの屋敷地を囲む西側の溝である。屋敷地東側の溝7次S D54との間の距離は22mである。第7次調査では屋敷地の南北でも溝が検出され、南側の溝は何度か掘り直されている。北のS D04と南のS D09の間の距離は11mであり、ちょうど東西の距離の半分になる。北側のS D54は中世前半の遺構か、とされており時期が異なる。しかし、図化できないほどの土師器、白磁の細片が出土しているだけであり、他の軸を同一にする溝のほとんどが中世末から近世初頭の遺構であるので、この時期まで下げて考えてもよいのではないか。また、本調査区で検出された溝S D202は一部を陸橋状に埋め戻しており、屋敷地内への出入口ではないか。

以上のように、今回の調査の結果、第7次調査区で検出されていた屋敷地の続きが見つかり、屋敷地の規模が東西22m、南北11mの長方形であったとする復元案を提示することができた。

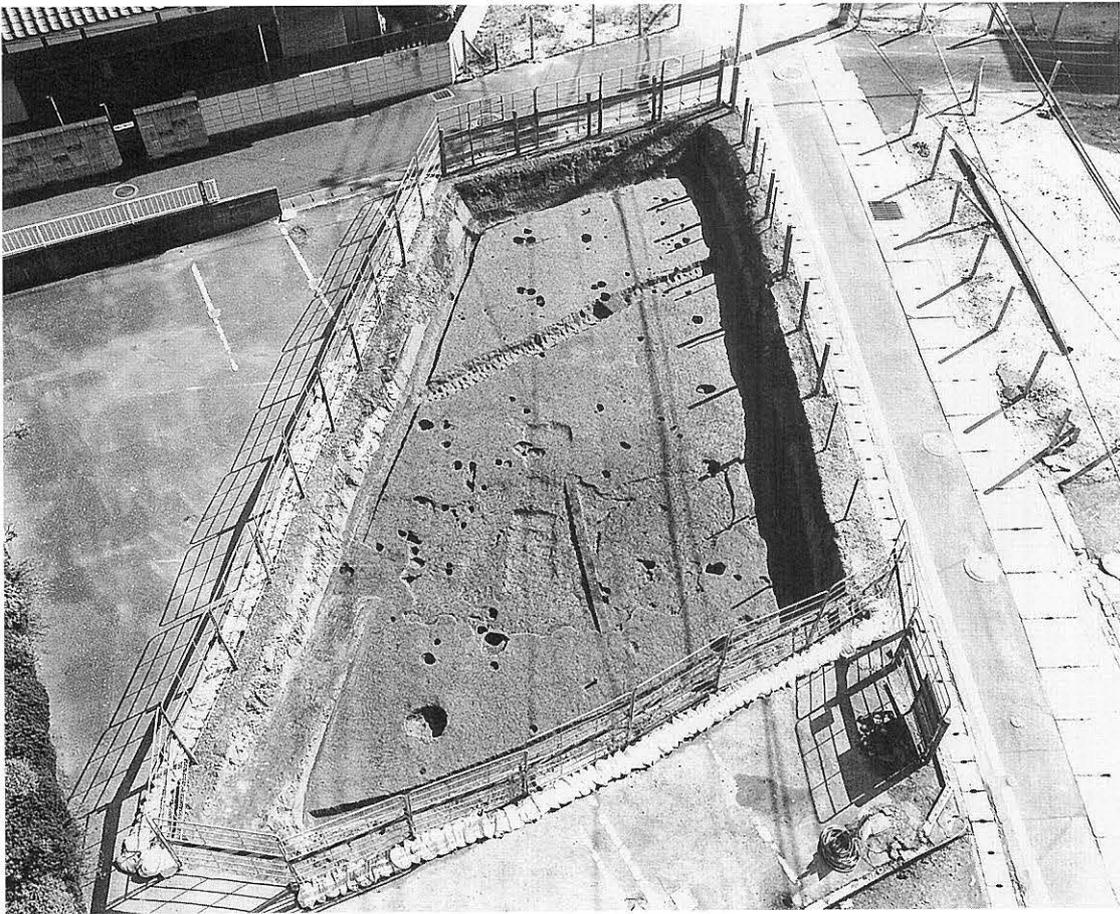


第28図 第7次・9次B区調査遺構配置図 (1/250)

図 版



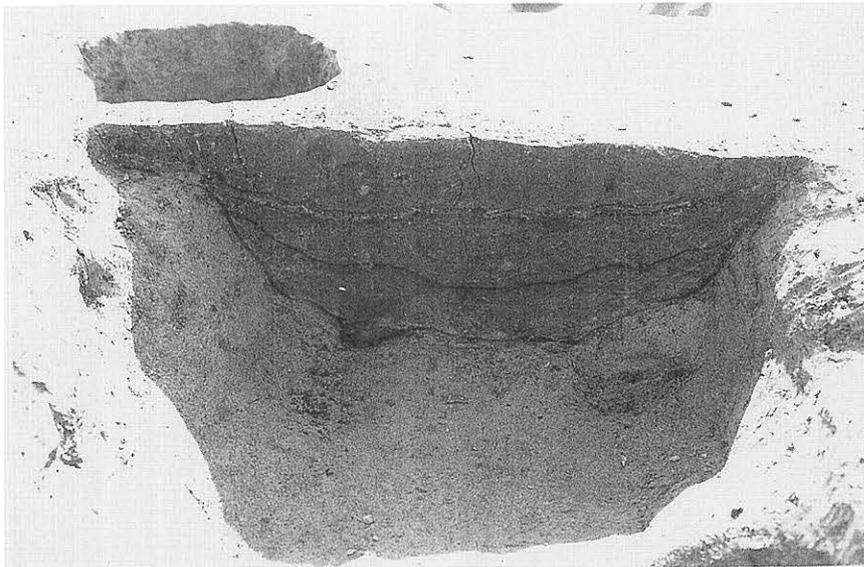
第9次調査A区より南東方向道路予定地を望む



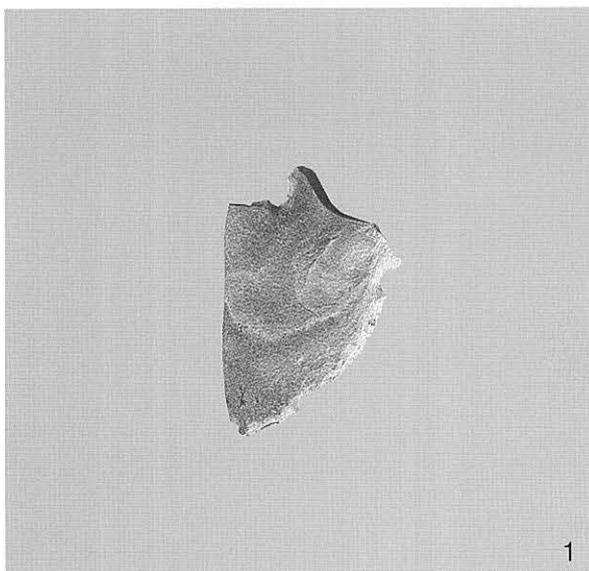
調査区全景（北より）



(1) 調査区より道路予定地
南方を望む



(2) SD01溝土層断面
(東より)



1



2

(3) 出土遺物



(2) A区南半 (北西から)



(1) A区全景 (南東から)



(2) SD03 (北東から)



(1) A区北半 (北東から)



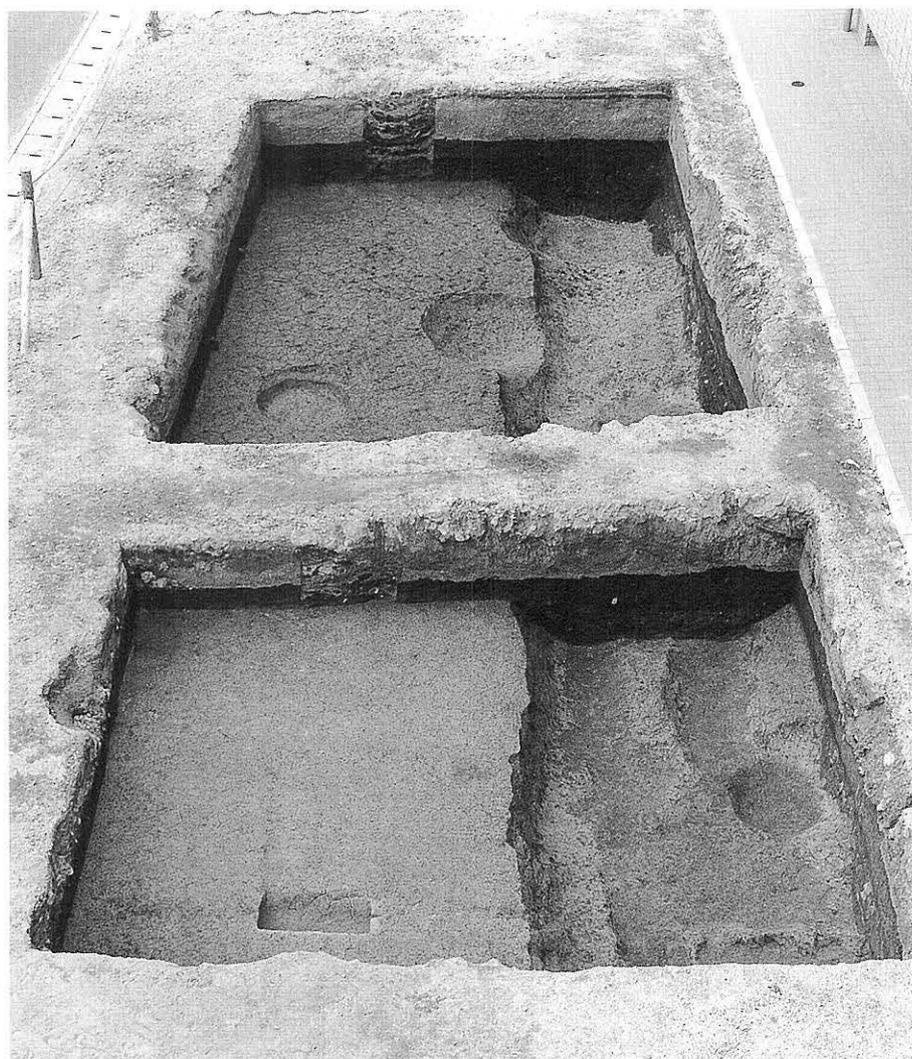
(1) SD03土層A-A'
(西から)



(2) SD03土層B-B'
(東から)



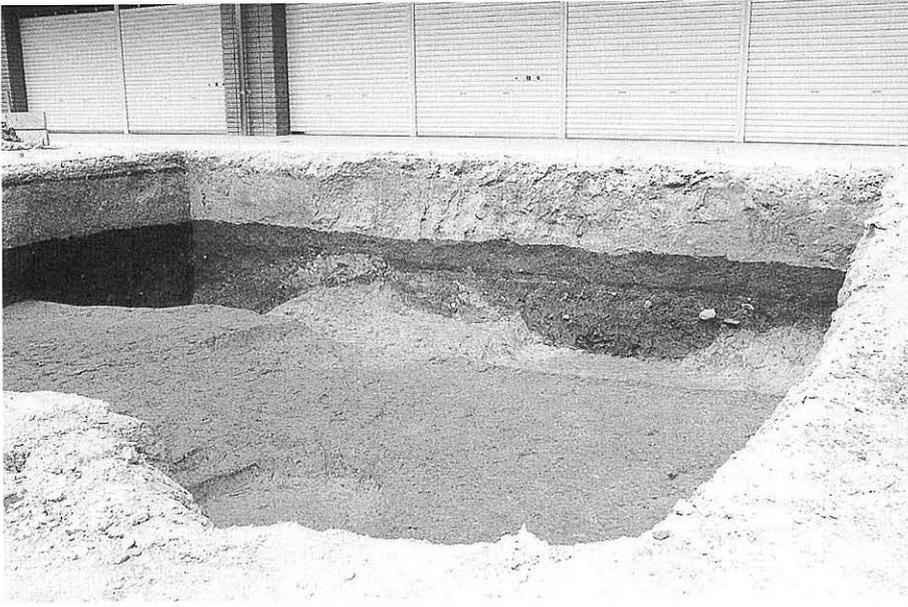
(3) トレンチA西壁土層



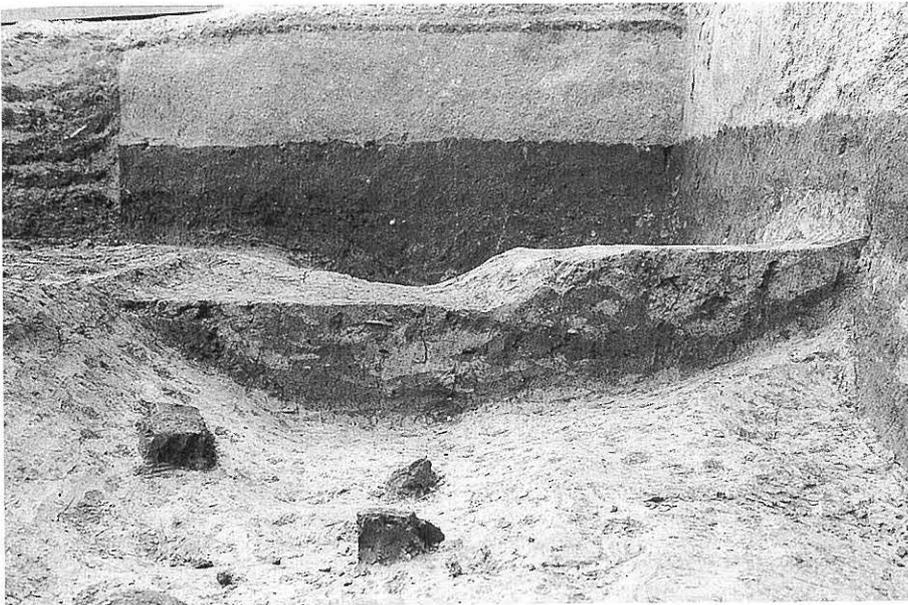
(1) B区全景 (南から)



(2) B区北半遺構検出状況・陸橋部 (北から)



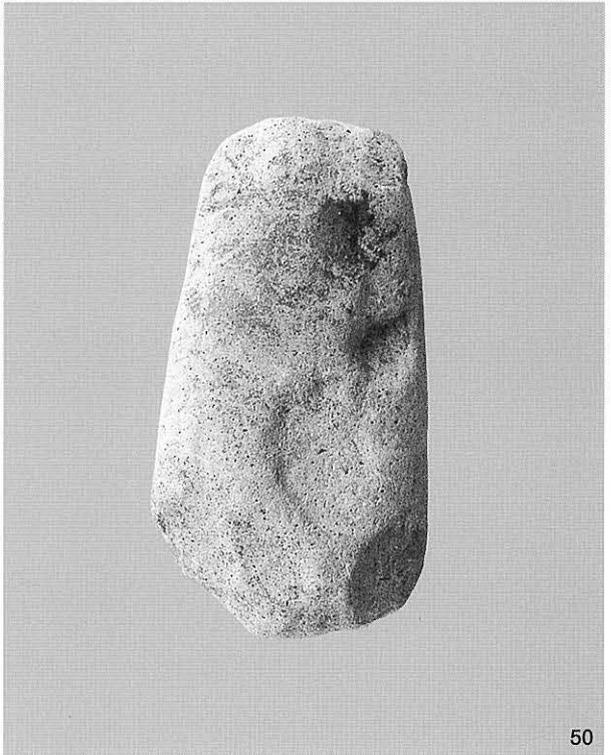
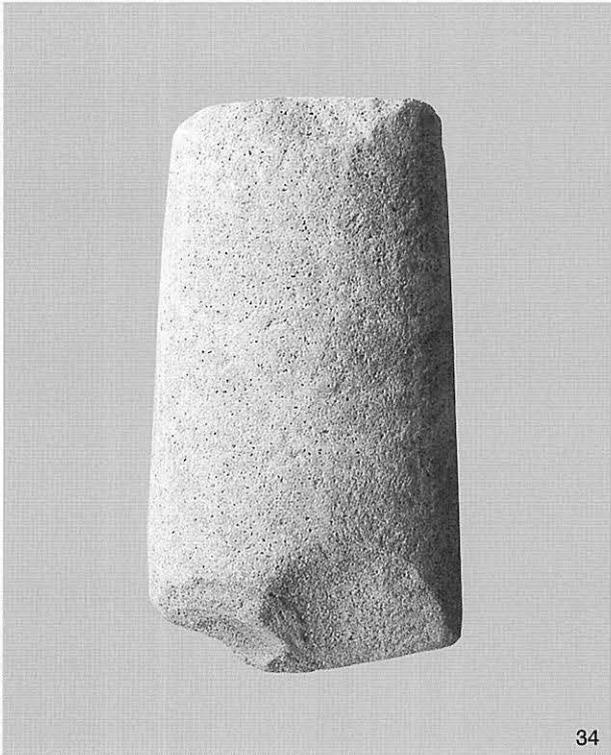
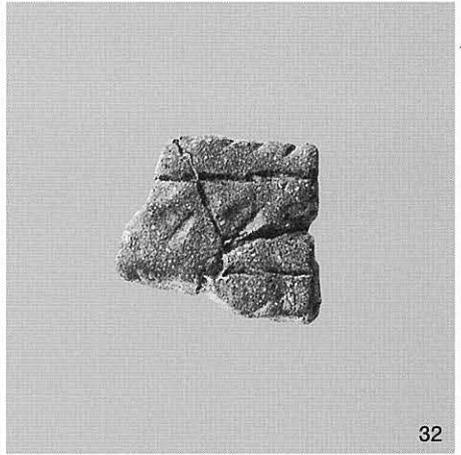
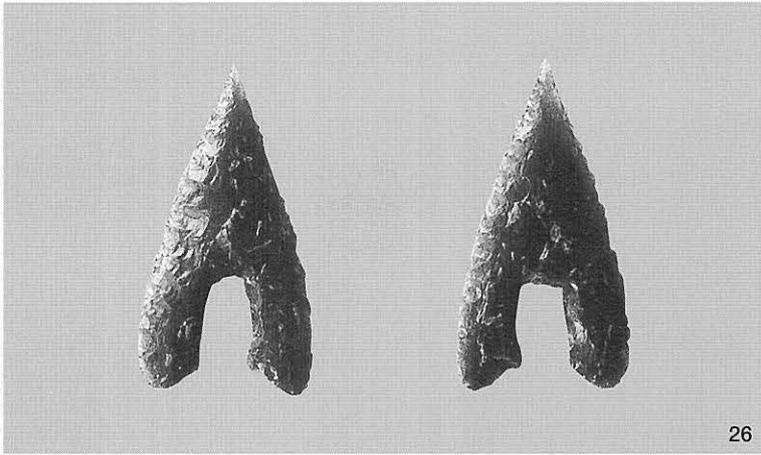
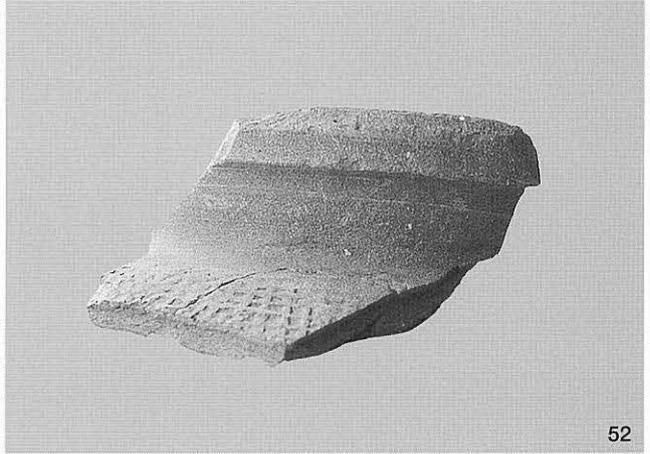
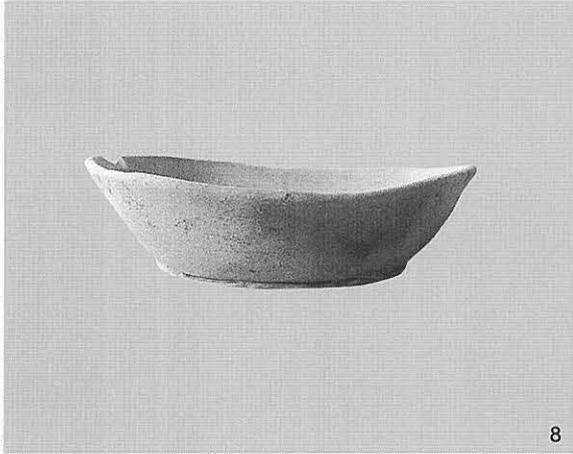
(1) B区北半東壁土層



(2) SD202土層A-A'
(南から)



(3) SD201・202土層B-B'
(南から)



報 告 書 抄 録

ふりがな	おおはしいーいせきろく							
書名	大橋E遺跡6							
副書名	第8・9次調査報告							
巻次								
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第791集							
編著者名	阿部泰之、上角智希							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1-8-1 TEL.092-711-4667							
発行年月日	2004年 3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東緯	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おほしいーいせき 大橋E遺跡 たいじたいじ 第8次・第9次	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 みなみくおおはし 南区大橋 ちようめ 4丁目14-30、6ほか	40132		33°	130°	2001.10.15	235㎡ 1400㎡	道路建設
				33′	25′	2001.11.09		
				37″	42″	2002.04.01 2002.07.30		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
大橋E遺跡 第8次・第9次	集落	中世前期 近世	掘立柱建物 1基 土壇 14基 柵列 1基 溝 4基	縄文の石鏃、石匙。 土師器、輸入陶磁器 国産陶磁器				

大橋E遺跡6

—第8・9次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第791集

2004年（平成16年）3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

☎(092) 711-4667

印刷 有限会社 シャープ印刷社

福岡市博多区博多駅南2丁目4-16

☎(092) 451-6543

